

Rational IBM Rational Developer for System z
7.6.1

インストール・ガイド



Rational IBM Rational Developer for System z
7.6.1

インストール・ガイド



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、83 ページの『IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Developer for System z バージョン 7.6.1 (プログラム番号 5724-T07)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GI11-8297-03

Rational® IBM Rational Developer for System z

7.6.1

Installation Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2010.5

© Copyright IBM Corporation 2000, 2010.

目次

表	v
本書について	vii
本書の対象読者	ix
Developer for System z についての詳細 情報の入手先	xi
第 1 章 Developer for System z の概要	1
プリインストール作業	1
第 2 章 クライアント・インストール要件	3
メディア要件	3
追加オフラインのメディア	4
ハードウェア要件およびソフトウェア要件	5
Developer for System z のクライアント前提条件	5
第 3 章 インストールの計画	11
インストール方式	11
CD からのインストール	11
電子イメージの使用	11
HTTP サーバー上のリポジトリからのインスト ール	12
フィーチャーのインストール	12
Developer for System z のフィーチャー	13
第 4 章 IBM Installation Manager	19
Installation Manager のインストール	20
Installation Manager の開始	21
Installation Manager のアンインストール	21
Installation Manager の使用	21
インストール・リポジトリ	21
パッケージ・グループと共用リソース・ディレク トリ	22
第 5 章 Developer for System z のイ ンストール	25
インストール作業の要約	25
概要: インストール CD からの Developer for System z のインストール	25
概要: ワークステーション上の電子イメージから の Developer for System z のインストール	26
概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール	27
概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリから の Developer for System z のインストール	28
概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置	29
ランチパッド・プログラムの使用	29

Installation Manager の操作	34
サイレント・インストール	37
共用ドライブまたはサーバーへのインストール・ イメージのコピー	37
応答ファイルの作成	39
Installation Manager をサイレント・インストー ル・モードで実行	40
応答ファイル・コマンド	41
参照: サンプル応答ファイル	46
サイレント・インストール・ログ・ファイル	47
Installation Manager をウィザード・モードで実行	47
第 6 章 ポストインストール作業	49
リモート・ヘルプまたは Web ベース・ヘルプ	49
Web ベースのヘルプ・コンテンツ	50
Web ベース・ヘルプへのアクセス	51
ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサ イトを使用したヘルプ・コンテンツのダウンロー ド	52
ヘルプ・コンテンツの更新	53
ローカル・ヘルプ更新プログラムと RDz7.6_updateSite.zip ファイルを使用したヘル プ・コンテンツのローカル・インストール	54
ヘルプ・コンテンツの除去	55
ヘルプ・コンテンツ用のイントラネット・サーバ ーのセットアップ	56
ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法の変更	56
ライセンスの管理	59
許可ユーザー・ライセンス	59
フローティング・ライセンス	59
ライセンスの使用可能化	60
インストール済みパッケージのライセンス情報の 表示	60
製品アクティベーション・キットのインポート	61
フローティング・ライセンスの使用可能化	61
ライセンスの購入	62
第 7 章 Developer for System z の開 始	65
第 8 章 インストール済みパッケージの変 更	67
第 9 章 インストール済みパッケージの更 新	69
第 10 章 Developer for System z のア ンインストール	71
第 11 章 マイグレーション	73

WebSphere Developer for zSeries または WebSphere
Developer for System z ワークスペースのマイグレーション 73

付録 A. 追加ソフトウェアのインストール 75

必要な System z コンポーネントのインストール . . . 75
IBM TxSeries for Multiplatforms のインストール . . . 75
UML Profiles for COBOL Development 拡張機能のインストール 75
RSE Server for Multiplatform のインストール 76

付録 B. 既知の問題および制限事項 . . . 77

WebSphere Developer for zSeries バージョン 6.0.1
ワークスペースの非互換性 77

付録 C. IBM Packaging Utility 79

Packaging Utility のインストール 79
Packaging Utility を使用してパッケージを HTTP サーバーにコピー 80

IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項. 83

著作権使用許諾 84
商標 84

索引 87

表

1.	CD と電子イメージ・ディレクトリーの名前の対応	3
2.	Developer for System z のフィーチャー	13
3.	ユーザー役割および関連フィーチャー	31
4.	サイレント・インストール・コマンドで使用する引数	40
5.	サイレント・インストール設定のキー	42
6.	サイレント・インストール時に使用するファイル・コマンド	44

本書について

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Developer for System z® バージョン 7.6.1 のインストールおよびアンインストールを行うための手順が記載されています。

本書では以下の作業について説明します。

- インストールの準備
- IBM Rational Developer for System z のインストール
- 必要なワークステーション・ソフトウェアおよびオプションのワークステーション・ソフトウェアのインストール
- System z コンポーネントのインストール
- RSE Server for Multiplatform のインストール
- インストールにおける既知の問題および制限事項の理解

本書では、以下の名前が使用されます。

- *IBM Rational Developer for System z* は *Developer for System z* と呼ばれます
- *IBM Rational Developer for System z Common Access Repository Manager* は、*Common Access Repository Manager* と呼ばれ、*CARMA* と省略されます

注: 本書に記載されている構成情報は、IBM Rational Developer for System z バージョン 7.6.1 のものです。

本書の対象読者

本書は、ワークステーションで Developer for System z 7.6.1 クライアントをインストールおよび構成するプログラマーを対象としています。本書を使用するには、Microsoft® Windows® オペレーティング・システムに精通している必要があります。

Developer for System z についての詳細情報の入手先

本書には、Developer for System z の使用についての情報は含まれていません。詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。

製品の問題および制限事項については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD の Documents¥nl¥en¥readme ディレクトリーにある Readme76.html ファイルを参照してください。

更新された資料およびトラブルシューティング情報については、Developer for System z Web サイトの「Library」ページ (<http://www-306.ibm.com/software/awdtools/rdz/library>) を参照してください。

第 1 章 Developer for System z の概要

Developer for System z には、ホスト・コンポーネントとワークステーション・クライアント・コンポーネントがあります。ホスト・コンポーネントは一般にその設置場所のシステム・プログラマーによってインストールされ、アプリケーション・プログラマーに対して透過的です。本書ではこれ以降、ホスト・コンポーネントが特に呼び出されない限り、Developer for System z という用語は、ツールのワークステーション・コンポーネント (Eclipse プラットフォームで稼働するグラフィカル・ユーザー・インターフェース) のことを指します。

Developer for System z は、Eclipse プラットフォーム (www.eclipse.org) で作成されている一揃いの開発ツールです。Eclipse プラットフォームはフレームワークとお考えください。また、Developer for System z および他のバンドル・オファリングはツール・コントリビューターとお考えください。

プリインストール作業

製品をインストールする前に、以下に示す手順を実行してください。

1. ご使用のシステムが 3 ページの『第 2 章 クライアント・インストール要件』で説明されている要件を満たしていることを確認します。
2. ユーザー ID が製品をインストールするために必要なアクセス権を満たしていることを確認します。 9 ページの『ユーザー特権の要件』を参照してください。
3. 11 ページの『第 3 章 インストールの計画』を読みます。

第 2 章 クライアント・インストール要件

インストールの準備として、以下の要件を確認する必要があります。

- メディア要件
- ハードウェア要件およびソフトウェア要件

メディア要件

言及されている CD の名前は、以下の表に示すように、対応する電子イメージ・ディレクトリーの名前で置き換えることができます。

表 1. CD と電子イメージ・ディレクトリーの名前の対応

CD 名	電子イメージ・ディレクトリー名
IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD	RDz76Edition_Setup 注: Edition の値は、Developer for System z の版によって異なります。
IBM Rational Developer for System z インストール CD 1	RDz76¥disk1
IBM Rational Developer for System z インストール CD 2	RDz76¥disk2
IBM Rational Developer for System z z/OS® SMPE インストール CD	RDz76_zOS_SMPE
IBM Rational Developer for System z RSE Server for AIX®, Linux®, および Linux on System z インストール CD	RDz76_RSE
IBM Rational Developer for System z ライセンス・アクティベーション CD	RDz76_License
IBM Rational Developer for System z ドキュメンテーション CD	RDz76_Documentation
UML Profiles for COBOL Development 拡張機能インストール CD	RDz76_UMLProfiles¥disk1

ワークステーションへ Developer for System z をインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスできる必要があります。

- 以下の Developer for System z インストール CD
 - IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD
 - IBM Rational Developer for System z インストール CD 1
 - IBM Rational Developer for System z インストール CD 2
- IBM Rational Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage® からダウンロードして展開すると、以下の Developer for System z インストール用ディレクトリーがワークステーションに作成されます。

- RDz76Edition_Setup
- RDz76¥disk1
- RDz76¥disk2

追加オフリングのメディア

Developer for System z のメディアに加えて、Developer for System z にバンドルされている他のオフリング用に追加のインストール・メディアがあります。これには、IBM Rational Business Developer または IBM Rational Application Developer が含まれることがあります。ご使用できるバンドル・ソフトウェアは、どの版の Developer for System z を購入したかによって異なります。本書ではこれ以降、Developer for System z にバンドルされているこれらのオフリングは、バンドル・オフリング と呼ばれます。

必要な System z コンポーネントを System z ホストへインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスする必要があります。

- IBM Rational Developer for System z:
 - *IBM Rational Developer for System z z/OS SMPE インストール CD*
- IBM Rational Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage からダウンロードして展開すると、以下のディレクトリーが、必要なソフトウェアを System z ホストにインストールするために使用されます。

- RDz76_zOS_SMPE

必要な System z サーバー・ツールのインストールについて詳しくは、「*IBM Rational Developer for System z ホスト・プランニング・ガイド*」(GI88-4131)、「*IBM Rational Developer for System z Program Directory*」(GI88-4172)、および「*IBM Rational Developer for System z Host Configuration Guide*」(SC31-6930)を参照してください。

試用版ライセンスを永続ライセンスに変換するには、以下のメディアにアクセスする必要があります。

- *IBM Rational Developer for System z*
 - *IBM Rational Developer for System z ライセンス・アクティベーション CD*
- *IBM Rational Developer for System z* 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage からダウンロードして展開すると、以下のディレクトリーがライセンスの変換に適用されます。

- RDz76_License

ライセンスの変換について詳しくは、61 ページの『製品アクティベーション・キットのインポート』を参照してください。

UML Profiles for COBOL Development 拡張機能をインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスする必要があります。

- *IBM Rational Developer for System z*
 - *UML Profiles for COBOL Development 拡張機能インストール CD*
- *IBM Rational Developer for System z* 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage からダウンロードして展開すると、以下のディレクトリーが UML Profiles for COBOL Development 拡張機能のインストールに適用されます。

– RDz76_UMLProfiles¥disk1

このソフトウェアのインストールについて詳しくは、75 ページの『UML Profiles for COBOL Development 拡張機能のインストール』を参照してください。

ハードウェア要件およびソフトウェア要件

以下の Developer for System z に関するハードウェア要件とソフトウェア要件は、「*IBM Rational Developer for System z の前提条件*」にも記載されています。この資料のコピーは、*IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD の Documents ディレクトリーにあります。

Developer for System z のクライアント前提条件

Developer for System z は、大規模ビジネス・アプリケーションを作成するユーザーをサポートするためのライセンス・プログラムです。

このソフトウェアを使用するには、前提条件と相互必要条件があります。

ハードウェア要件

製品をインストールするためのハード・ディスクの最小スペース所要量に対応していることを確認します。インストール・プロセスの段階ごとのスペース所要量を次の表に示します。

ハードウェア	要件
プロセッサー	Intel® Pentium® III 800 MHz または互換性のあるプロセッサー より性能のよいプロセッサーを推奨します。
メモリー	1.5 GB RAM 推奨最小容量: 2 GB RAM
ディスク・スペース	IBM Rational Developer for System z の従来のデベロッパー役割をインストールするには、1.1 GB のディスク・スペースが必要です。 その他のバンドル・ソフトウェアをインストールする場合には、5 GB のディスク・スペースを推奨します。 <ul style="list-style-type: none">ディスク・スペース所要量は、インストールするフィーチャーに応じて削減することができます。開発するリソース用に、追加のディスク・スペースが必要になります。製品をインストールするために電子イメージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。NTFS ではなく FAT32 を使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。
ディスプレイ	1024 x 768 の解像度で、256 色 これより高い解像度および色数の多いカラー・パレットを推奨します。

ハードウェア	要件
その他のハードウェア	Microsoft マウスまたはその互換ポインティング・デバイス

ワークステーションの前提条件

製品をインストールする前に、システムがソフトウェア要件を満たしているかを確認してください。

オペレーティング・システム: 以下のオペレーティング・システムがこの製品でサポートされています。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Windows 7.0	必要なサービス・レベルなし
Microsoft Windows XP Professional	Service Pack 2
Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition	Service Pack 1
Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition	Service Pack 1
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Edition	必要なサービス・レベルなし
Microsoft Windows Server 2008 Standard Edition	必要なサービス・レベルなし
Microsoft Windows Vista Business	必要なサービス・レベルなし
Microsoft Windows Vista Enterprise	必要なサービス・レベルなし
Microsoft Windows Vista Ultimate	必要なサービス・レベルなし

注:

1. Developer for System z コンパイラーを使用して Windows バイナリーを作成することは Windows 7.0 ではサポートされていません。
2. Developer for System z の言語サポートは、基本言語サポートを持つ、上記にリストされたオペレーティング・システムに依存します。
3. Developer for System z は、Windows 2003 の 32 ビット・モードおよび Windows 2008 の 32 ビット・モードの操作をサポートします。
4. Developer for System z は、IBM Java™ Development Kit (JDK) のバージョン 1.6 以降を使用する Eclipse IDE バージョン 3.4.2 で使用するために開発されています。この要件を満たす既存の Eclipse IDE のみが拡張可能です。

開発用ホスト環境/仮想化サポート:

製品名	バージョン	必要な PTF またはサービス・レベル
Windows Terminal Services	Windows 2008 以降	使用可能なすべてのメンテナンス
Citrix® (32 ビットおよび 64 ビット)	Presentation Server 4.X	使用可能なすべてのメンテナンス

製品名	バージョン	必要な PTF または サービス・レベル
VMware®	vSphere 4.0	使用可能なすべてのメンテナ ンス

注: Developer for System z は、64 ビット Windows を 32 ビット互換モードで使用した Citrix 仮想環境下での実行をサポートします。

仮想化環境における IBM SWG 製品に対するソフトウェア・サポート・サービスについて詳しくは、「VMware 環境における IBM SWG 製品に対するソフトウェア・サポート (Software support for IBM SWG products in a VMware environment)」および「Citrix Metaframe および Rational Team Unifying Platform バージョン 7.0 のサポート・ポリシー (Support Policy for Citrix Metaframe and Rational Team Unifying Platform version 7.0)」を参照してください。

ワークステーションの相互必要条件

Developer for System z では、インストールする Developer for System z 機能により、インストールの前提条件としてこのセクションにリストされたソフトウェアのインストールが必要となります。

注: サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

TXSeries for Multiplatforms: 組み込み CICS® ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム 番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 7.1	使用可能なすべてのメンテナンス
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 6.2	使用可能なすべてのメンテナンス
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 6.1	IZ00893

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/software/http/cics/txseries/>

DB2 for Windows: 組み込み SQL ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム 番号	製品名	必要な PTF または サービス・レベル
5765-F35	DB2® Workgroup Server Edition v 9.5	フィックスパック 3 以上
5724-B55	DB2 Connect Personal Edition v 9.5	フィックスパック 3
5765-F41	DB2 Enterprise Server Edition v 9.5 for Windows	フィックスパック 3 以上

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/9/>

注: プリコンパイルには DB2 Workgroup Server Edition v9.5 が、またホスト・データベースへのアクセスには DB2 Connect™ Personal Edition v9.5 が必要です。

Rational Software Architect: UML から COBOL を生成する機能を使用するには、以下のアプリケーションがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5724-V88	Rational Software Architect v 7.5	

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www-01.ibm.com/software/awdtools/swarchitect/standard/>

Rational Team Concert for System z: Developer for System z リモート・プロジェクトを使用した Jazz ベースのソース制御には、以下のレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名
5724-V82	Rational Team Concert™ for System z Client v 2.0

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www-01.ibm.com/software/awdtools/rtc/>

注: Rational Team Concert Client v 1.0 または Rational Team Concert for System z Client v 1.0.1 は、ローカル・プロジェクトなど、一部の Developer for System z 機能を選択的にサポートします。統合性を高め、完全な機能に対応できるようにするには、Rational Team Concert for System z Client v 2.0 を推奨します。

Web ブラウザー: README ファイルとインストール・ガイドを表示するには、以下の Web ブラウザーのいずれかがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Internet Explorer 6.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス
Firefox 1.5.x 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

Adobe Acrobat Reader: 製品資料 PDF を正しく表示するには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Adobe® Acrobat Reader Version 7.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

ユーザー特権の要件

IBM Rational Developer for System z をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID に 2 バイト文字が含まれていない。
- システムのすべてのユーザーに対しインストールする場合は、管理者グループに属する ID が必要です。管理者特権がない場合、現行ユーザーに対してしかインストールできません。

第 3 章 インストールの計画

製品フィーチャーをインストールする前に、ここに記載されたすべてのトピックをお読みください。インストールを実際に開始する前にインストール・プロセスの主な段階を適切に計画および理解することによって、多くの問題を回避することができます。

インストール方式

Developer for System z のインストール時に使用できる方式は数多くあります。

使用するインストール方式を決定する要因のいくつかは以下のとおりです。

- インストール・ファイルにアクセスするために使用するフォーマットと方法 (例えば、CD または IBM Passport Advantage からダウンロードされたファイル)。
- ご使用のワークステーションにインストールするか、またはインストール・ファイルを企業内で使用可能にするか。
- Installation Manager の GUI を使用してインストールするか、またはサイレント・インストールを実行するか。

使用する一般的なインストール方式は以下のとおりです。

- インストール CD からのインストール
- ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール
- HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

注: 後者の 3 つの方式では、Developer for System z をインストールするために、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行することを選択できます。サイレント・モードでの Installation Manager の実行について詳しくは、37 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

CD からのインストール

この方式では、インストール・ファイルが入った所有 CD-ROM ディスクを使用して、一般に、各自のワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、25 ページの『概要: インストール CD からの Developer for System z のインストール』を参照してください。

電子イメージの使用

電子イメージの解凍

IBM Passport Advantage からインストール・ファイルをダウンロードした場合は、インストールを開始する前に、Developer for System z およびインストールを希望するバンドル・オフリングの圧縮ファイルから電子イメージを解凍する必要があります。

ます。Developer for System z 電子イメージは、自己解凍型の実行可能ファイルとして圧縮されています。バンドル・オフアリングは、zip ファイルなど様々な形式で圧縮されています。

ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール

この方式では、IBM Passport Advantage からダウンロードしたインストール・ファイルを使用して、ワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、26 ページの『概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

この方式では、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z のインストール・ファイルにアクセスできるように、共用ドライブに電子イメージを置きます。手順の概要については、27 ページの『概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

この方式は、ネットワーク全体にインストールするための代替方法です。この方式は前の方式とは異なります。異なるのは、Developer for System z のインストール・ファイルを HTTP Web サーバーに配置するために、IBM Packaging Utility というユーティリティー・アプリケーション (Developer for System z インストール・メディアに付属) を使用しなければならない点です。IBM Packaging Utility は、HTTP Web サーバーから直接 Developer for System z をインストールできるように、そのインストール・ファイルをパッケージ・フォーマットでコピーするために使用します。このパッケージが入った HTTP Web サーバー上のディレクトリは、リポジトリと呼ばれます。同じリポジトリをその他のオフアリングおよび将来のサービス更新に使用することができます。手順の概要については、28 ページの『概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール』および 29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

フィーチャーのインストール

インストールするフィーチャーおよびバンドル・オフアリングを選択して、Developer for System z のインストールをカスタマイズすることができます。Developer for System z のランチパッドにはユーザー役割のリストが用意されており、そこから、企業内のデベロッパー役割に最も近い記述の役割を選択することができます。ユーザー役割を選択すると、デベロッパー役割に推奨される、Developer for System z フィーチャーおよびバンドル・オフアリングの組み合わせが選択された状態で、インストールが起動します。選択可能なユーザー役割およびバンドル・オフアリングは、購入した Developer for System z の版によって異なります。

代わりに、ランチパッド・プログラムからカスタム・インストールを起動できます。その場合は、すべての Developer for System z フィーチャーおよびバンドル・オフアリングがデフォルトで選択された状態でインストールが起動します。

注: ユーザー役割を選択するか、カスタム・インストールの実行を選択するかに関係なく、インストールを開始する前に、追加フィーチャーの選択および選択解除ができるようになっていきます。デフォルトで選択されているフィーチャー・セットに制限されているわけではありません。ユーザー役割および Developer for System z ランチパッド・プログラムについて詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。

Installation Manager は、フィーチャー間の依存関係を自動的に強制し、必要なフィーチャーが選択解除されないようにします。

注: パッケージのインストールが終了した後でも、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行することにより、インストール済み環境にフィーチャーの追加や除去ができます。詳しくは、67 ページの『第 8 章 インストール済みパッケージの変更』を参照してください。

Developer for System z のフィーチャー

次の表は、インストール可能な Developer for System z のフィーチャー、およびデフォルトでそれらを含むユーザー役割を示しています。Developer for System z にバンドルされている他のオファリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオファリングの資料を参照してください。

注: チームおよびリポジトリのサポート・フィーチャー (SCLM Developer Toolkit と Rational ClearCase® SCM Adapter) および CARMA フィーチャーは、どのユーザー役割からも選択されていません。対話するソフトウェア構成管理システムに従い、これらフィーチャーのうち 1 つ以上を選択できます。

表 2. Developer for System z のフィーチャー

フィーチャー	説明	ユーザー役割
System z 統合開発環境 (必須)	メインフレームに接続して、COBOL、PL/I、アセンブラー、C++、および Java でメインフレーム・ベースのアプリケーションを開発するほかに、COBOL、PL/I、および Java でワークステーション・ベースのアプリケーションを開発できる、対話式のワークステーション・ベース環境を提供します。このフィーチャーには、AIX や Linux for System z など他の環境への接続が含まれます。	<ul style="list-style-type: none">• System z トラディショナル・デベロッパー• サービス・デベロッパー• Web デベロッパー• J2EE/WAS デベロッパー
System z コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、System z のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを迅速に作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。	<ul style="list-style-type: none">• System z トラディショナル・デベロッパー• サービス・デベロッパー• Web デベロッパー• J2EE/WAS デベロッパー

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明	ユーザー役割
SCLM Developer Toolkit	Software Configuration and Library Manager (SCLM) 管理ソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。	ユーザー役割により未選択
Rational ClearCase SCM Adapter	IBM Rational ClearCase SCM プラグインおよび ClearCase MVFS プラグインを提供します。これらのプラグインにより、ClearCase VOB およびビュー・サーバーもインストールされている場合に、スナップショット・ビューおよび動的ビューを使用して、ClearCase のバージョン付きオブジェクト・ベース (VOB) 中のソフトウェア成果物のバージョン管理を行うことが可能になります。	ユーザー役割により未選択
CA Endevor Software Change Manager	CA Endevor Software Change Manager 管理ソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
Enterprise Service Tools for CICS	Enterprise Service Tools for CICS は、最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の CICS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および CICS TS や CICS Service Flow Runtime を含み、直接 z/OS システムに対して成果物を処理するサービス・フローをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。	<ul style="list-style-type: none"> • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
BMS Screen Designer	基本マッピング・サポート (BMS) マップ・セットを視覚的に作成および変更することができます。CICS 開発者で、端末ベースのツール (例えば SDF II) に習熟した開発者や、GUI ベースのツール (VA COBOL に組み込まれた BMS エディターなど) に習熟した開発者が使用できるようにデザインされています。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明	ユーザー役割
CICS コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、CICS Transaction Server のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを迅速に作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。例えば、UML モデルまたはデータベース・スキーマ定義を使用して、DB2 テーブルに作成、読み取り、更新、および削除のインターフェースを提供する CICS トランザクションを生成します。	<ul style="list-style-type: none"> • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
CICS Service Component Architecture	CICS にて Service Component Architecture をサポートするツールを提供します。新規および既存の資産を再使用可能なコンポーネントおよびサービスとして統合およびデプロイすることにより、従来の CICS システムに付加価値を与えます。	<ul style="list-style-type: none"> • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
Enterprise Service Tools for IMS	Enterprise Service Tools for IMS™ は、最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の IMS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および IMS SOAP ゲートウェイや IMS info 2.0 アプリケーションを含み、直接 z/OS システムに対して成果物を処理することをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。	<ul style="list-style-type: none"> • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
MFS Screen Designer	メッセージ形式サービス (MFS) メッセージの作成および変更と、ファイルのフォーマット設定を行うことができます。多くの情報管理システム (IMS) プログラムは、端末装置との間で送受信するメッセージをフォーマット設定する IMS Transaction Manager 環境機能の 1 つである、MFS に基づいています。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
IMS コード生成プログラム	共通のプログラミング・オブジェクトを IMS アプリケーション・コードに迅速に追加できるコード・スニペットを提供します。	<ul style="list-style-type: none"> • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明	ユーザー役割
データ・ツール	テーブル、テーブル・ビュー、およびフィルターを操作するためのリレーショナル・データベース・ツールを提供します。これらのツールでは、データベース・テーブルのリパース・エンジニアリングによって、または DDL スクリプトを使用することによって、物理データベース・モデルを作成できます。このツールを使用して、SQL ステートメント、DB2 ルーチン (ストアド・プロシージャおよびユーザー定義関数など)、および SQLJ、SQL DDL、XML ファイルといった何種類ものファイル・タイプを作成することもできます。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
System z Stored Procedures	COBOL、PL/I、Java、または SQL で書かれた DB2 ストアド・プロシージャを作成してテストし、z/OS システムに直接デプロイすることができます。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
File Manager	多くのデータ・セット・タイプのデータの複数のビューとのフォーマット済み編集セッションなど、IBM File Manager for z/OS 機能を Rational Developer for System z に提供します。 注: このフィーチャーには、IBM File Manager for z/OS のライセンスが必要です。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー
Fault Analyzer	異常終了する問題のリアルタイム分析時に IBM Fault Analyzer for z/OS によって作成される障害エントリーを処理できるようにします。 注: このフィーチャーには、IBM Fault Analyzer for z/OS のライセンスが必要です。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明	ユーザー役割
Common Access Repository Manager (CARMA)	System z ベースのソース制御管理ツールにアクセスするための、統一されたインターフェースおよび一連のサービスを提供します。 CARMA はまた、カスタム・ソース制御管理システムにアクセスおよび結合するためのフレームワークとして使用できる汎用グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) クライアントを提供します。	ユーザー役割により未選択。
プラグイン開発環境 (PDE)	Eclipse プラグインを作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイするためのツールを提供します。これらのプラグインを使用して、Rational Developer for System z Eclipse 環境の拡張を行うことができます。	<ul style="list-style-type: none"> • System z トラディショナル・デベロッパー • サービス・デベロッパー • Web デベロッパー • J2EE/WAS デベロッパー

第 4 章 IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、Developer for System z および他のパッケージをワークステーションにインストールするプログラムです。また、インストールしたこれらのパッケージや他のパッケージを更新、変更、およびアンインストールします。パッケージとは、Installation Manager を使用してインストールするように設計されている製品、コンポーネント・グループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager の最新情報については、下記アドレスのインストール・インフォメーション・センターにアクセスしてください。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r2/index.jsp>

Installation Manager は、時間を節約するための数多くのフィーチャーを提供するインストール管理ツールです。コンピューターで製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行うのに役立ちます。インストールしようとしているパッケージ、さらにすでにインストールされているパッケージ、およびインストール可能なパッケージを追跡します。最新バージョンのパッケージをインストールしようとしていることがわかるように、更新を検索します。また、インストールするパッケージのライセンス管理や、パッケージの更新および変更を行うためのツールも備えています。

Installation Manager には、パッケージの保守を、そのライフ・サイクルを通じて容易にするための以下の 6 つのウィザードがあります。

- 「パッケージのインストール (Install Packages)」ウィザードは、インストール・プロセスを順を追ってガイドします。単にデフォルトを受け入れてパッケージをインストールするか、デフォルト設定を変更してカスタム・インストールを行うことができます。インストール前に、ウィザードを通じて選択した項目の完全な概要が示されます。ウィザードを使用すると、1 つ以上のパッケージを一度にインストールすることができます。
- 「パッケージの更新」ウィザードは、インストールされているパッケージに対する使用可能な更新を検索します。更新は製品の、リリースされた修正、新規フィーチャー、または新規バージョンのいずれかです。更新の内容の詳細が、ウィザードで示されます。更新を適用するかどうかを選択できます。
- 「パッケージの変更」ウィザードは、すでにインストールされているパッケージの特定エレメントを変更します。パッケージの初回インストール時に、インストールするフィーチャーを選択します。後で他のフィーチャーが必要になった場合は、「パッケージの変更」ウィザードを使用して、パッケージにそれらを追加することができます。また、フィーチャーを除去したり、言語を追加または除去することもできます。
- 「パッケージのロールバック」ウィザードを使用して、インストールされている製品の更新をアンインストールして、その製品の前のバージョンに戻すことができます。
- 「ライセンスの管理」ウィザードは、パッケージのライセンスのセットアップに役立ちます。試用版ライセンスをフル・ライセンスに変更したり、フローティン

グ・ライセンス用にサーバーをセットアップしたり、パッケージごとに使用するライセンスのタイプを選択したりするには、このウィザードを使用します。

- 「パッケージのアンインストール」ウィザードは、コンピューターからパッケージを除去します。複数のパッケージを一度にアンインストールすることができます。

Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は通常、Developer for System z インストール・プロセスの一部として自動的にインストールされます。

Developer for System z をインストールしないで、IBM Installation Manager だけをインストールする必要がある場合は、IBM Installation Manager インストーラーを使用します。これは `im.installer.win32.zip` と呼ばれる zip ファイルとして提供されます。このファイルは、物理インストール CD を使用する場合は IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD の IMInstaller ディレクトリーにあり、電子イメージをダウンロードした場合は RDz76Edition_Setup ディレクトリーにあります。IBM Installation Manager をインストールするには、以下の手順を行います。

1. システム上の一時ディレクトリーに `im.installer.win32.zip` ファイルを unzip して、インストール・ファイルを解凍します。IBM Installation Manager のインストール・イメージを企業内の他のユーザーと共用したい場合は、他のユーザーがそのイメージにアクセスできるように、ファイルの解凍を共用ドライブ上のロケーションに行うこともできます。
2. システムの全ユーザーに対し管理者としてインストールする場合には、`install.exe` プログラムを実行します。これは、IBM Installation Manager のインストール・イメージを解凍したディレクトリーのルートにあります。現行ユーザーに対してのみ非管理者としてインストールする場合には、`userinst.exe` プログラムを実行します。
3. 画面のプロンプトに従って、IBM Installation Manager をインストールします。

また、以下の手順で、Installation Manager のサイレント・インストールを実行することもできます。

1. システム上の一時ディレクトリーに `im.installer.win32.zip` ファイルを unzip して、インストール・ファイルを解凍します。IBM Installation Manager のインストール・イメージを企業内の他のユーザーと共用したい場合は、他のユーザーがそのイメージにアクセスできるように、ファイルの解凍を共用ドライブ上のロケーションに行うこともできます。
2. 以下のコマンドを、インストール・イメージを解凍したディレクトリーのルートから実行して、IBM Installation Manager のサイレント・インストールを実行します。
 - 管理者によるインストール:
`installc.exe --launcher.ini silent-install.ini`
 - 非管理者によるインストール:
`userinstc.exe --launcher.ini user-silent-install.ini`

IBM Installation Manager のインストールについて詳しくは、IBM Installation Manager の資料を参照してください。

Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、Developer for System z のインストールを実行すると、自動的にインストールされ、開始します。Installation Manager を手動で開始して、更新、変更、ロールバック、またはアンインストールをインストール後のパッケージに対して行う必要がある場合は、以下を行います。

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2.
 - 管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」->「IBM Installation Manager」->「IBM Installation Manager」を選択します。
 - 非管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」->「My IBM Installation Manager」->「IBM Installation Manager」を選択します。

Installation Manager のアンインストール

IBM Installation Manager をアンインストールするには、Windows で「プログラムの追加と削除」パネルを使用する必要があります。

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2. 「コントロール パネル」->「プログラムの追加と削除」->「IBM Installation Manager」を選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックして、オペレーティング・システムから出される指示に従います。

注: すべてのパッケージがアンインストールされるまで IBM Installation Manager をアンインストールすることはできません。

Installation Manager の使用

インストール・リポジトリ

インストール可能なオフラインまたはパッケージは、リポジトリと呼ばれるロケーションに保管され、それは HTTP Web サーバー、共用ネットワーク・ドライブ、物理 CD、ご使用のローカル・マシンの上のいずれかになります。Installation Manager は、これらのリポジトリからパッケージを取り出して、それをシステムにインストールします。

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから起動すると、必要なリポジトリ情報が Installation Manager へ自動的に渡されます。Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始するときは必ず、Installation Manager のリポジトリ設定に、インストールするパッケージが入ったリポジトリを指定して、Installation Manager にその検索場所を知らせる必要があります。詳しくは、22 ページの『Installation Manager でのリポジトリ設定』を参照してください。

組織によっては、独自の製品パッケージをイントラネット内でバンドルおよびホストする場合があります。このタイプのビジネス・ケース・シナリオについては、12ページの『HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を取得することが必要になります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、インストールするそれぞれのパッケージに組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、サービス更新や新規フィーチャーといったインストール可能なパッケージを検索します。

Installation Manager でのリポジトリ設定

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なリポジトリ情報がその開始時に Installation Manager へ自動的に渡されます。ただし、例えば Web サーバーにあるリポジトリからパッケージをインストールするなどのために、Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始する場合は、パッケージをインストールする前に、Installation Manager の設定にリポジトリ・ロケーションを追加する必要があります。これは、Installation Manager の「設定」ウィンドウの「リポジトリ」パネルで行います。デフォルトでは、Installation Manager は、それぞれの Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージ、更新、および新規フィーチャーを検索します。お客様の組織で、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトすることが必要になる場合があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリ URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下の手順を行います。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「開始」ページで、「ファイル」->「設定」をクリックしてから、「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、URL を参照してファイル・パスを入力してから、「OK」をクリックします。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不能である場合は、「アクセス可能」列に赤い x が表示されます。
5. 「OK」をクリックして終了します。

パッケージ・グループと共用リソース・ディレクトリ

IBM Installation Manager を使用して Developer for System z をインストールするときは、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Developer for System z およびインストールする他のバンドル・オファリングのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。これはシェル共用として知られています。

Installation Manager を使用して Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールする場合は、新しいパッケージ・グループを作成するか、パッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするかを選択することができます。(パッケージによっては、パッケージ・グループを共用できないことがあります。このような場合は、既存のパッケージ・グループを使用するためのオプションは使用不可になります。)

注: 複数のパッケージを同時にインストールするときは、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

パッケージ・グループには、自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーはユーザーが選択します。

パッケージを正常にインストールして、パッケージ・グループを作成した後は、そのパッケージ・グループのインストール・ディレクトリーを変更できません。インストール・ディレクトリーには、そのパッケージ・グループにインストールしたパッケージに固有のファイルとリソースが入っています。他のパッケージ・グループが共用する可能性のあるパッケージ内の他のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに入れられます。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリーは、異なるパッケージ・グループに入っている可能性の高い、異なるパッケージによる共用が可能なリソースを保管しているディレクトリーです。これらのリソースに共通のロケーションを使用すると、Installation Manager は、複数のパッケージによって使用される同じリソースの個別コピーをインストールするのではなく、各リソースの 1 つのコピーのみをインストールしてディスク・スペースを節約できます。

重要: 共用リソース・ディレクトリーを指定できるのは、パッケージの初回インストール時の 1 回のみです。最適な結果が得られるように、最大のドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、後でディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

既存の Eclipse IDE の拡張

Developer for System z パッケージには、Eclipse 統合開発環境 (IDE) のバージョンつまりワークベンチが含まれます。これは Developer for System z のインストール時にインストールされます。ただし、すでにインストールされている既存の Eclipse 統合 IDE がワークステーションにある場合は、既存の環境に Developer for System z 機能を追加することによって、その IDE を拡張できます。

Developer for System z のインストール中に、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで「既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing

Eclipse IDE)」 オプションを選択して、既存の Eclipse IDE を拡張します。既存の Eclipse IDE と、使用する Java 仮想マシン (JVM) のロケーションが求められます。

例えば、Developer for System z パッケージで提供される機能を取得したいが、Developer for System z の機能进行操作する際には現行 IDE の設定を使用したい場合などに、既存の Eclipse IDE を拡張することができます。また、すでにインストール済みのプラグインを操作して、Eclipse IDE を拡張することもできます。

既存の Eclipse IDE はバージョン 3.4 でなければなりません。また、拡張する IBM Java Development Kit (JDK) は少なくともバージョン 1.6 を使用する必要があります。Installation Manager は、指定された Eclipse 環境がインストール・パッケージの要件を満たすかどうかを検査します。要件を満たしていない場合には、その Eclipse IDE を拡張できません。

第 5 章 Developer for System z のインストール

インストール作業の要約

ここでは、Developer for System z のインストール時に使用する各種のインストール方式の概要を示します。

概要: インストール CD からの Developer for System z のインストール

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが入った CD-ROM ディスクを使用し、一般的なケースとして、ご使用のワークステーションに Developer for System z をインストールする方法について説明します。

インストール CD からインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

- 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. *IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD* を CD-ROM ドライブに挿入します。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、Developer for System z のランチパッド・プログラムが自動的にオープンします。自動実行が使用不可になっている場合は、CD のルートから `launchpad.exe` を実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。
4. 「**Rational Developer for System z のインストール**」または「**Rational Developer for System z のアップグレード**」を選択します。
5. この手順は、Developer for System z の新規リリースをインストールするのか、または Developer for System z の既存リリースを更新するのかにより異なります。
 - Developer for System z のインストールの場合、ユーザー役割を選択して、Developer for System z フィーチャーおよびバンドル・オファリングの推奨セットでインストールを起動します。代わりに、ランチパッドでカスタム・インストールに対応するリンクをクリックすることにより、すべての Developer for System z フィーチャーおよびバンドル・オファリングが指定されたカスタム・インストールを起動することもできます。詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。
 - Developer for System z の更新の場合、「**既存のインストールをアップグレードするために Installation Manager を起動する (Launch Installation Manager to upgrade an existing installation)**」をクリックします。Installation Manager が起動したら、「**更新**」ボタンをクリックします。
6. IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示、または (ランチパッドの選択によっては) 「パッケージの更新」ウィザード

ドの画面上の指示に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。詳しくは、34 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。

7. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オファリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている場合で、期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合には、ここで行います。例えば、フローティング・ライセンス・サポートの設定が必要な場合があります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
8. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、75 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

電子インストール・イメージからインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

1. IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、解凍したインストール・イメージの両方を保管するために十分なスペースがワークステーションにあることを確認します。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. インストールする Developer for System z およびバンドル・オファリングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から一時ディレクトリーにダウンロードします。
3. ダウンロードした圧縮ファイルからインストール・イメージを解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。
4. 下の『電子イメージからのインストール』の手順に進みます。

電子イメージからのインストール

以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. RDz76Edition_Setup ディレクトリーのルートから launchpad.exe を実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。
3. 「**Rational Developer for System z のインストール**」または「**Rational Developer for System z のアップグレード**」を選択します。
4. この手順は、Developer for System z の新規リリースをインストールするのか、または Developer for System z の既存リリースを更新するのにより異なります。
 - Developer for System z のインストールの場合、ユーザー役割を選択して、各自の役割に対応する Developer for System z フィーチャーおよびバンドル・オファリングの推奨セットでインストールを起動します。代わりに、ランチパッドで対応するリンクをクリックすることにより、すべての Developer for

System z フィーチャーおよびバンドル・オファリングでカスタム・インストール起動を選択することもできます。詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。

- Developer for System z の更新の場合、「既存のインストールをアップグレードするために **Installation Manager** を起動する (**Launch Installation Manager to upgrade an existing installation**)」をクリックします。Installation Manager が起動したら、「更新」ボタンをクリックします。
- 5. IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示、または「パッケージの更新」ウィザードの画面上の指示に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。詳しくは、34 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。
- 6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オファリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている場合で、期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合には、ここで行います。例えば、フローティング・ライセンス・サポートの設定が必要な場合があります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
- 7. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、75 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

このシナリオでは、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z およびバンドル・オファリングのインストール・ファイルにアクセスできるように、共用ドライブに電子イメージを置きます。これは、数多くのユーザー・システムでサイレント・インストールを実行する必要がある場合にも役立ちます。以下の手順は、共用ドライブにインストール・イメージを置く人が行う手順です。

1. IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、解凍したインストール・イメージの両方を保管するために十分なディスク・スペースが共用ドライブにあることを確認します。詳しくは、5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. Developer for System z およびバンドル・オファリングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から共用ドライブ上の一時ディレクトリにダウンロードします。

注: また、パーツをワークステーションにダウンロードして、解凍したインストール・イメージのみを共用ドライブにコピーすることもできます。

3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリに解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Developer for System z を対話式にインストールするには、以下の手順を行います。

1. インストール・イメージのある共用ドライブ上の RDz76Edition_Setup ディレクトリに移動します。
2. 26 ページの『電子イメージからのインストール』の手順に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。

共用電子イメージを使用したサイレント・インストールの実行については、37 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール

このシナリオでは、IBM Installation Manager が HTTP Web サーバーから製品パッケージを取得します。

以下の手順では、Developer for System z およびバンドル・オファリングのパッケージが入ったリポジトリを HTTP Web サーバー上に作成したものと想定します。HTTP Web サーバーへのインストール・パッケージのコピーについて詳しくは、29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリから Developer for System z パッケージをインストールするには、以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。20 ページの『Installation Manager のインストール』を参照してください。
3. Installation Manager を開始します。詳しくは、21 ページの『Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Installation Manager で、Developer for System z パッケージが入ったリポジトリの URL をリポジトリ設定に追加します。22 ページの『Installation Manager でのリポジトリ設定』を参照してください。
5. 「インストール」または「更新」をクリックして Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードまたは「パッケージの更新」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードまたは「パッケージの更新」ウィザードの画面上の指示に従って、インストールを完了します。
6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オファリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている場合で、期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合には、ここで行います。例えば、フローティング・ライセンス・サポートの設定が必要な場合があります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
7. IBM Rational Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、75 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置

IBM Packaging Utility を使用してインストール・リポジトリを作成することにより、Developer for System z インストール・パッケージと他のオフライン・パッケージを HTTP Web サーバーに配置することができます。これは、Developer for System z 7.6.1 オフラインおよびそのバンドル・オフラインに加えて、さまざまな数多くのオフラインやサービス更新を単一のリポジトリに置きたい場合に行うと便利です。このリポジトリを使用して、対話式インストールまたはサイレント・インストールを実行できます。

注: HTTP Web サーバー上のリポジトリからサイレント・インストールを実行できますが、ここの手順はサイレント・インストールの実行に必須ではありません。

パッケージを HTTP Web サーバーに配置するには、IBM Packaging Utility を使用して、新規インストール・リポジトリを作成するか、既存のリポジトリへコピーします。Packaging Utility を使用したインストール・リポジトリの作成について詳しくは、80 ページの『Packaging Utility を使用してパッケージを HTTP サーバーにコピー』を参照してください。リポジトリを作成すると、以下を行うことができます。

1. 企業内のユーザーに、インストール・リポジトリの URL を提供します。ユーザーは、自分のシステムにインストール・メディアがなくても、リポジトリを指してインストールを実行することができます。
2. リポジトリを使用して、サイレント・インストールを実行します。サイレント・インストールの実行について詳しくは、37 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

ランチパッド・プログラムの使用

Developer for System z ランチパッド・プログラムでは、リリース情報の表示とインストール・プロセスの開始を単一のロケーションで行うことができます。

以下のケースでは、ランチパッド・プログラムを使用して、Developer for System z のインストールを開始します。

- 製品インストール CD からインストールする。
- ワークステーション上の電子イメージからインストールする。
- 共用ドライブ上の電子イメージからインストールする。

インストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なリポジトリ・ロケーション情報が自動的に構成された状態で、IBM Installation Manager が起動します。このため、Installation Manager の設定で、リポジトリ・ロケーションを手動で設定する必要はありません。

Developer for System z バージョン 7.6.1 を新規にフルインストールするか、または既存の Developer for System z バージョン 7.5 を Developer for System z バージョン 7.6.1 にアップグレードすることができます。

Developer for System z バージョン 7.6.1 を新規にインストールする場合、ランチパッドの「*Rational Developer for System z* のインストール」パネルのリストからユーザー役割を選択できます。これらの役割はそれぞれ、企業内で果たすことができるデベロッパー役割を示しています。Developer for System z ユーザーとしての役割に最も近い記述のユーザー役割を選択して、各自の役割に推奨されるフィーチャーおよびバンドル・オファリングのカスタム・セットを選択した状態で、インストールを起動します。選択可能なユーザー役割のリストを以下に示してあります。購入した Developer for System z の版によっては、これらの役割の一部が表示されない場合があります。それぞれの役割の記述がランチパッド・パネルに示されます。

- System z トラディショナル・デベロッパー

CICS または IMS アプリケーション、DB2 ストアード・プロシージャ、バッチ・アプリケーション、またはグリーン・スクリーン・インターフェースの開発または保守を行う開発者。この開発者は、IBM 問題判別ツール、CICS エクスプローラー・インターフェース、およびソース・コード管理システムへアクセスすることもできます。

- サービス・デベロッパー

従来のワークロードの開発または保守を行い、かつ System z アプリケーションおよびプログラムを Web サービスまたはサービス・フローとして外に公開する開発者。これには System z トラディショナル・デベロッパーの機能も含まれます。

- Web デベロッパー

EGL 言語を使用してアプリケーションおよび Web インターフェースを作成し、CICS、IMS、DB2、またはバッチ・アプリケーションに接続する System z 開発者。これにはサービス・デベロッパーの機能も含まれます。

- J2EE/WAS デベロッパー

Java Enterprise Edition を使用してアプリケーションおよび Web インターフェースを作成し、CICS、IMS、DB2、またはバッチ・アプリケーションに接続する System z 開発者。これにはサービス・デベロッパーの機能も含まれます。

以下の表に、ユーザー役割および各役割に関連する Developer for System z の対応フィーチャーを示します。(各フィーチャーの説明については、13 ページの表 2 を参照してください。)

表 3. ユーザー役割および関連フィーチャー

ユーザー役割	関連フィーチャー
System z トラディショナル・デベロッパー	<ul style="list-style-type: none"> • System z 統合開発環境 • System z コード生成プログラム • BMS Screen Designer • MFS Screen Designer • データ・ツール • System z Stored Procedures • System z デバッガー • File Manager • Fault Analyzer • プラグイン開発環境 (PDE)
サービス・デベロッパー	<ul style="list-style-type: none"> • System z 統合開発環境 • System z コード生成プログラム • Enterprise Service Tools for CICS • BMS Screen Designer • CICS コード生成プログラム • CICS Service Component Architecture • Enterprise Service Tools for IMS • MFS Screen Designer • IMS コード生成プログラム • データ・ツール • System z Stored Procedures • System z デバッガー • File Manager • Fault Analyzer • プラグイン開発環境 (PDE)

表 3. ユーザー役割および関連フィーチャー (続き)

ユーザー役割	関連フィーチャー
Web デベロッパー	<ul style="list-style-type: none"> • System z 統合開発環境 • System z コード生成プログラム • Enterprise Service Tools for CICS • BMS Screen Designer • CICS コード生成プログラム • CICS Service Component Architecture • Enterprise Service Tools for IMS • MFS Screen Designer • IMS コード生成プログラム • データ・ツール • System z Stored Procedures • System z デバッガー • File Manager • Fault Analyzer • プラグイン開発環境 (PDE) <p>このユーザー役割は、IBM Rational Business Developer および IBM WebSphere® Application Server Test Environment オフアリングも選択します。</p>
J2EE / WAS デベロッパー	<ul style="list-style-type: none"> • System z 統合開発環境 • System z コード生成プログラム • Enterprise Service Tools for CICS • BMS Screen Designer • CICS コード生成プログラム • CICS Service Component Architecture • Enterprise Service Tools for IMS • MFS Screen Designer • IMS コード生成プログラム • データ・ツール • System z Stored Procedures • System z デバッガー • File Manager • Fault Analyzer • プラグイン開発環境 (PDE) <p>このユーザー役割は、IBM Rational Application Developer および IBM WebSphere Application Server Test Environment オフアリングも選択します。</p>

ユーザー役割を選択する代わりに、カスタム・インストールの実行を選択できます。カスタム・インストールを選択すると、すべてのフィーチャーおよびバンドル・オファリングがデフォルトで選択された状態で、Developer for System z のインストールが起動します。

注: ランチパッド・プログラムからいずれのインストール・オプションを選択した場合も、追加フィーチャーの選択および選択解除を行うことにより、インストールするフィーチャー・セットをいつでもカスタマイズできます。

ランチパッド・プログラムから Developer for System z のインストールを管理者として開始するには、以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』に記載されているプリインストール作業がまだ完了していなければ、その作業を完了します。
2. インストール CD からインストールする場合は、*IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD* を CD ドライブに挿入します。電子イメージからインストールする場合は、RDz76Edition_Setup ディレクトリーを開きます。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開始します。システムで自動実行が有効になっていない場合、または電子イメージからインストールする場合は、以下を行います。
 - EGL または Java のどちらか希望する開発言語に対応する launchpad.exe を実行します。launchpad.exe は、CD またはディレクトリーのルートにあります。
4. 「ようこそ」パネルの情報を読み、左側にある「製品資料」タブを選択すると、選択可能な資料のリストが表示されます。パネルでリンクをクリックして、製品資料を表示します。
5. 既存の IBM Rational Developer for System z をアップグレードする場合、「**IBM Rational Developer for System z のアップグレード**」タブをクリックします。「**既存のインストールをアップグレードするために IBM Installation Manager を起動する (Launch IBM Installation Manager upgrade an existing installation)**」をクリックします。(これは IBM Rational Developer for System z V7.5.x から V7.6.1 へアップグレードする場合にのみ有効です。) IBM Installation Manager の起動後、「更新」ボタンをクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードのプロンプトに従ってインストールを完了します。詳しくは、34 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。
6. IBM Rational Developer for System z の新規インストールを実行する場合は、左側にある「**IBM Rational Developer for System z のインストール**」タブをクリックします。「役割の説明」タブが表示されます。選択可能な役割について知りたい場合は、このタブをクリックします。その後、「**IBM Rational Developer for System z のインストール**」を再クリックします。
7. パネルのユーザー役割のリストから、各自のユーザー役割を選択します。これにより、各自の役割に推奨されるフィーチャーおよびバンドル・オファリングのカスタマイズ・セットが選択された状態で、Developer for System z のインストールが起動します。ユーザー役割について詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。代わりに、すべてのフィーチャーおよびバンドル・オファリングがデフォルトで選択された状態で行う、カスタム・インストールの実行を選択できます。

管理者または非管理者のどちらでインストールするかについても決めておく必要があります。管理者としてインストールする場合、「管理者権限でのインストール」ボックスにチェック・マークを付けるようにしてください。（このボックスには、デフォルトでチェック・マークが付いています。）非管理者としてインストールする場合、このボックスのチェック・マークを外します。

8. Developer for System z およびインストールすることを選択したバンドル・オファリングのインストールを実行するために、IBM Installation Manager が起動します。「パッケージのインストール」ウィザードのプロンプトに従って、インストールを完了します。詳しくは、『Installation Manager の操作』を参照してください。

Installation Manager の操作

ランチパッド・プログラム（29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照）から Developer for System z のインストールを起動すると、IBM Installation Manager が開始して、「パッケージのインストール」ウィザードが示されます。以下の手順は、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードを使用して Developer for System z をインストールするプロセスです。

1. ウィザードの最初のパネルに、インストールに選択可能なパッケージのリストが表示されます。選択可能なパッケージには、Developer for System z および、ランチパッドで選択したユーザー役割に推奨されるバンドル・オファリングが含まれます。ランチパッド・プログラムおよびユーザー役割について詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。選択可能なバンドル・オファリングは、購入した Developer for System z の版によって異なります。

インストールを続行する準備が整ったら、「次へ」をクリックします。

Installation Manager は、選択されたパッケージに関する情報を収集して、「ライセンス」パネルに進みます。

2. IBM Installation Manager の新規バージョンがある場合は、更新するように求めるプロンプトが出されます。プロンプトが出されたら、「はい」をクリックして更新をインストールするか、または後でその新しいバージョンをインストールする場合には、「いいえ」をクリックします。「はい」をクリックすると、Installation Manager は自らを更新して、更新を完了するには再始動する必要がありますことを通知します。

「OK」をクリックして、Installation Manager を再始動します。

3. 「ライセンス」パネルで、選択したパッケージのご使用条件をお読みください。インストールするように選択した各パッケージにご使用条件があります。「ライセンス」パネルの左側にある各パッケージ名をクリックして、対応するご使用条件を表示してください。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「同意する (I accept the terms of the license agreements)」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして先に進みます。
4. 「ロケーション」パネルに、Installation Manager から、Developer for System z パッケージを格納する新規パッケージ・グループを作成するか、システム上の既存のパッケージ・グループを使用するかのオプションが示されます。同じパ

パッケージ・グループにパッケージをインストールする場合、それらは共通ワークベンチを共用し、異なるパッケージの機能はそのワークベンチで結合されます。これはシェル共用として知られています。異なるパッケージ・グループにインストールされたパッケージはワークベンチを共用せず、互いに別々に保持されます。

Developer for System z に新規パッケージ・グループを作成するには、以下を行います。

- a. ラジオ・ボタンの「**新規パッケージ・グループの作成**」を選択します。
- b. 新規パッケージ・グループに使用するインストール・ディレクトリーを入力します。このディレクトリーは、パッケージ・グループにインストールされるパッケージに固有のリソースが保管される場所です。システム上に作成するパッケージ・グループごとに、個別のインストール・ディレクトリーを持ちます。このディレクトリーは、異なるパッケージ・グループのパッケージによる共用が可能なリソースがインストールされている共用リソース・ディレクトリーとは異なります。
- c. システムに他のパッケージがインストールされていない場合は、共用リソース・ディレクトリーに使用するロケーションの選択を求めるプロンプトも表示されます。Installation Manager を使用してインストールするすべてのパッケージによって使用され、かつ最初のパッケージをインストールした後の変更は不可であるため、共用リソース・ディレクトリーは、最大ドライブ上のロケーションを選択することをお勧めします。すでに 1 つ以上のパッケージをシステムにインストール済みの場合は、Installation Manager から、共用リソース・ディレクトリーのロケーションが表示されますが、それを選択または変更するオプションは示されません。

注: 共用リソース・ディレクトリーのロケーションを後で変更するには、すべてのパッケージをアンインストールしてから、新しい共用リソース・ディレクトリーを指定してパッケージを再インストールする必要があります。

Developer for System z を既存のパッケージ・グループにインストールするには、以下を行います。

- a. ラジオ・ボタンの「**既存のパッケージ・グループの使用**」を選択します。
- b. Installation Manager から、システム上の選択可能なパッケージ・グループのリストが表示されます。Developer for System z のインストール先にするパッケージ・グループを選択します。Installation Manager は、選択されたパッケージ・グループが Developer for System z と互換性のあることを検証します。互換性がない場合は、問題を知らせるエラー・メッセージが Installation Manager から表示されます。互換性のあるパッケージ・グループを選択するか、または新規パッケージ・グループの作成を選択するまで、インストールを続行することはできません。

選択が終了したら、「次へ」をクリックして先に進みます。

5. 次の「**ロケーション**」パネルで、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張して、インストールするパッケージ内の機能を追加することを選択できます。このオプションを選択するには、IBM Java Development Kit (JDK) バージョン 1.6 以上を使用する Eclipse バージョン 3.4

が必要です。Eclipse と JDK は、既存のものを拡張するのではなく、Developer for System z と一緒にパッケージされたものを使用することをお勧めします。

- 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「次へ」をクリックして先に進みます。
 - 既存 Eclipse IDE を拡張するには、以下を行います。
 - a. 「**既存の Eclipse を拡張 (Extend an existing Eclipse)**」を選択します。
 - b. 「**Eclipse IDE**」フィールドに、Eclipse 実行可能ファイル (eclipse.exe) が入ったフォルダーのロケーションを入力するか、またはそのロケーションまでナビゲートします。Installation Manager によって、Eclipse IDE バージョンが、インストールするパッケージに有効であるかが検査されます。「**Eclipse IDE JVM**」フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「次へ」をクリックして先に進みます。
6. 次の「**ロケーション**」ページの「**言語**」で、このパッケージ・グループ用にインストールする言語を選択します。Developer for System z のユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションに対応する各国語翻訳がインストールされます。

注: この選択は、このパッケージ・グループにインストールされるすべてのパッケージに適用されます。

注: このリリースの Developer for System z では、使用可能な言語のいずれかを選択すると、インストールされるすべての言語の各国語翻訳ができます。

7. 「**フィーチャー**」パネルで、Developer for System z およびインストールするバンドル・オファリング用にインストールするフィーチャーを選択します。フィーチャーの名前をクリックして、そのフィーチャーの記述を表示することができます。フィーチャーの記述は、パネル下部にある「**詳細**」セクションに表示されます。Developer for System z の使用可能なフィーチャーについて詳しくは、12 ページの『フィーチャーのインストール』を参照してください。
- Developer for System z にバンドルされているオファリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオファリングの資料を参照してください。

インストールするフィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。

8. 「**ヘルプ・システム構成 (help system configuration)**」ページ上で、以下のオプションのうち 1 つを選択してから、「次へ」をクリックします。
- **Web からヘルプにアクセス (Access help from the Web)**
 - **ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルにアクセス (Download help and access content locally)**
 - **イントラネット上のサーバーからヘルプにアクセス (Access help from a server on your intranet)**
9. インストールを開始する前に、「**要約**」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が適切である場合は、「**インストール**」をクリック

クしてパッケージをインストールします。インストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが表示されます。

10. インストール・プロセスが完了すると、インストールの成功を確認するためのメッセージが表示されます。

現行セッションのインストール・ログ・ファイルを表示するには、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックしてインストール・ログを新しいウィンドウで開きます。

11. 必要に応じて、Installation Manager の「**ライセンスの管理**」パネルで、インストール済みの Developer for System z および他のバンドル・オファリングのライセンスを構成します。これには、フローティング・ライセンス・サポートの設定、あるいは永続または期限付きライセンス・キーをインストールするための製品アクティベーション・キットのインストールなどがあります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。

サイレント・インストール

Developer for System z は、サイレント・モードでインストールすることができます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、そのユーザー・インターフェースが使用不可になるため、代わりに応答ファイルを使用して、パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。

サイレント・モードで Installation Manager を実行すると、バッチ・プロセスを使用して、スクリプトによりパッケージをインストール、更新、変更、およびアンインストールできるので、便利です。

サイレント・インストールには次の 3 つのメインタスクがあります。

1. インストール・イメージを共用ドライブまたはサーバー上のロケーションにコピーする (サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合)
2. 応答ファイルを作成する
3. Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行する

共用ドライブまたはサーバーへのインストール・イメージのコピー

サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合は、インストール・イメージを、イントラネット内の他のシステムがアクセスできるように共用ドライブ上のロケーションにコピーする必要があります。

インストール・イメージを物理インストール CD から共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. インストール・イメージを保管する共用ロケーションに、RDz_Setup という名前のディレクトリーを作成します。
2. *IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD* を CD-ROM ドライブに挿入します。
3. *IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD* の内容を、共用ロケーションに作成した RDz_Setup ディレクトリーにコピーします。

4. 製品インストール・ファイルを格納するための別のディレクトリーを共用ロケーションに作成します。このフォルダーには、例えば、RDz といった任意の名前を選択して付けることができます。
5. 製品インストール・ファイルを格納するために作成したディレクトリー内に、disk1 という名前のディレクトリーを作成します (例えば、RDz¥disk1)。このディレクトリーの名前は、サイレント・インストールが機能するために、disk1 でなければなりません。
6. *IBM Rational Developer for System z インストール CD 1* を CD-ROM ドライブに挿入します。
7. *IBM Rational Developer for System z インストール CD 1* の内容を、作成した disk1 ディレクトリーにコピーします。
8. ステップ 5 から 7 を同様に繰り返します。このとき作成するディレクトリーの名前は disk2 で、コピーは *IBM Rational Developer for System z インストール CD 2* の内容を disk2 ディレクトリーへ行います。
9. 例えば、IBM Rational Business Developer および IBM Rational Application Developer など、Developer for System z にバンドルされている他のオフリングをサイレント・インストール可能にする場合は、それらのオフリングに対して、ステップ 4 から 8 で従った同じプロセスを実行する必要があります。
 - a. バンドル・オフリングの製品インストール・ファイルを格納するための新規ディレクトリーを共用ロケーションに作成します。このディレクトリーには、任意の名前を選択して付けることができます。
 - b. 製品インストール・ファイルを格納するために作成したディレクトリー内に、インストール CD ごとに、そのための diskN ディレクトリーを作成します。N は、インストール CD の番号に対応します。各インストール CD の内容を、その CD 用に作成した対応する diskN ディレクトリーにコピーします。
10. インストール CD の内容を共用ロケーションにコピーし終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行の準備が整っています。

インストール・イメージを電子イメージから共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. サイレント・インストール可能にするバンドル・オフリングおよび Developer for System z のダウンロードした圧縮ファイルそれぞれを、イメージを保管する共用ロケーションに解凍します。代わりに、圧縮ファイルをローカル・マシンに解凍してから、その解凍ファイルおよびディレクトリーを共用ロケーションにコピーすることもできます。
2. 共用ロケーションで、以下が揃っていることを確認します。
 - a. 共用ディレクトリーのルートに、以下のディレクトリーが必要です。
 - RDz76Edition_Setup。Edition は、ダウンロードした Developer for System z の版によって異なります。
 - RDz76
 - 例えば、IBM Rational Business Developer および IBM Rational Application Developer など、サイレント・インストール可能にするバンドル

ル・オフアリングごとに 1 つのディレクトリー。選択可能なバンドル・オフアリングは、購入した Developer for System z の版によって異なります。

- b. **RDz76** ディレクトリー、および共用ロケーションにコピーしたバンドル・オフアリングごとのディレクトリーに、複数の diskN ディレクトリーが必要で、製品のインストール・ディスク 1 枚に 1 つのディレクトリーが対応します。
3. 共用インストール・イメージのディレクトリー構造を確認し終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行の準備が整っています。

代わりに、インストール・イメージを HTTP Web サーバー上のリポジトリーにコピーし、そのリポジトリーを使用してサイレント・インストールを実行できます。リポジトリーを作成するには、IBM Packaging Utility を使用する必要があります。詳しくは、29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

応答ファイルの作成

応答ファイルは、Installation Manager を使用して Developer for System z パッケージをインストールするときに、アクションを記録することによって作成できます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager GUI で選択したすべての項目が XML ファイルに保管されます。この同じ応答ファイルを使用して、他のシステム上でサイレント・インストールを実行できます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイルを使用して、パッケージの入ったリポジトリーの場所を探索したり、インストールするフィーチャーを選択したりします。

インストール (またはアンインストール) 用の応答ファイルを記録するには、以下の手順を行います。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。例えば、`cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse` です。
2. コマンド行で、次のコマンドを入力して Installation Manager を開始します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の名前とロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。

```
IBMIMC.exe -record <response file path and name>.xml -log  
             <log file path and name>.xml
```

例:

```
IBMIMC.exe -record C:\my_response_file.xml -log  
             C:\install_log.xml
```

注: 応答ファイルおよびログ・ファイルを保管する各ディレクトリーが存在していることを確認してください。Installation Manager は、応答ファイルおよびログ・ファイル用のディレクトリーを作成しません。

3. Installation Manager GUI を使用して、Developer for System z およびインストールしたい他のバンドル・オフアリングをインストールします。詳しくは、34 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。

4. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z および他のバンドル・オファリングのライセンスを構成します。これには、フローティング・ライセンス・サポートの設定、または永続ライセンス・キーをインストールするための製品アクティベーション・キットのインストールなどがあります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
5. Installation Manager を終了します。

Installation Manager を終了した後、XML 応答ファイルが作成され、Installation Manager を起動するのに使用するコマンドで指定したロケーションに格納されます。

IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ CD の SilentInstall ディレクトリーに、Developer for System z をインストールするために使用できるサンプル応答ファイルがあります。このサンプル応答ファイルはまた、電子イメージからインストールする場合には、RDz76Edition_Setup ディレクトリーにあります。このファイルは、そのまま使用して Developer for System z のサイレント・インストールを実行することも、または独自の仕様に合わせ変更することもできます。応答ファイルのカスタマイズについては、43 ページの『サイレント・インストール・コマンド』を参照してください。

Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行

Installation Manager は、コマンド行からサイレント・インストール・モードで実行できます。

サイレント・モードでの実行方法に関するその他の資料については、Installation Manager オンライン・ヘルプを参照してください。

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、Installation Manager がインストールされているディレクトリーから次のコマンドを実行して行うことができます。

```
IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -silent [arguments]
```

下の表に、サイレント・インストール・コマンドで使用する引数についての説明があります。

表 4. サイレント・インストール・コマンドで使用する引数

引数	説明
-input	この引数は、Installation Manager の入力として XML 応答ファイルを指定します。応答ファイルには、Installation Manager が実行するコマンドが入っています。
-log	(オプション) この引数は、サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。ログ・ファイルは XML です。

Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行するには、以下を行います。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。例えば、`cd "C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse"` です。
2. 次のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) のロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。例えば、`IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -silent -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml` です。

Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行されます。応答ファイルの読み取り、および指定されたディレクトリーへのログ・ファイルの書き込みが行われます。サイレント・インストール・モードでの実行時に応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。正常にインストールされると、戻りコード 0 で終了します。インストールがゼロ以外の数値で終了する場合、インストールは失敗しています。ゼロ以外の戻りコードを受け取る場合は、応答ファイルおよびログ・ファイルで失敗の考えられる原因を調べてください。ログ・ファイルについて詳しくは、47 ページの『サイレント・インストール・ログ・ファイル』を参照してください。ログ・ファイルをサイレント・インストール・コマンドの入力時に指定した場合は、その指定したログ・ファイルにすべてのエラーが記録されます。正常にインストールされると、ログ・ファイルには、単に `<result></result>` と記録されます。

応答ファイル・コマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、Installation Manager が実行しなければならないすべてのコマンドを収容する応答ファイルを作成する必要があります。これを行うには、Developer for System z をインストールする際のアクションを記録することによって、応答ファイルを作成する方法をお勧めします。ただし、応答ファイルは手動で作成または編集することもできます。

応答ファイルのコマンドには、次の 2 つのカテゴリーがあります。

- 設定コマンドは、Installation Manager の「ファイル」->「設定...」にある、リポジトリ・ロケーション情報などの設定を設定するために使用します。
- サイレント・インストール・コマンドは、Installation Manager で「パッケージのインストール (Install Packages)」ウィザードをエミュレートするために使用します。

サイレント・インストール設定コマンド

通常、設定は「設定」ウィンドウで指定しますが、サイレント・インストール時に使用する応答ファイルで、設定 (キーとして識別) を指定することもできます。

注: 複数の設定を応答ファイルに指定できます。

設定を応答ファイルに定義すると、XML コードは次の例のようなものになります。

```
<preference>
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set"
</preferences>
```

下の表を使用して、サイレント・インストール設定のキーとその関連値を確認してください。

表 5. サイレント・インストール設定のキー

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager ログ・ファイルのロ ケーションを指定し ます。	重要: このキーは任意 指定であり、テストお よびデバッグ用に設計 されています。ログ・ ファイルのロケーシ ョンを指定しなかった場 合、Installation Manager のサイレン ト・インストールおよ び UI バージョンは両 方とも、同じロケーシ ョンを使用します。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセン ス・ポリシー・ファ イルのある場所を定 義する URL を指定 します	
com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyEnabled	True または False	False がデフォルト値 です。
com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyHost	ホスト名または IP ア ドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyUseSocks	True または False	False がデフォルト値 です。
com.ibm.cic.common.core.preferences. SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP ア ドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences. SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences. ftp.proxyEnabled	True または False	False がデフォルト値 です。
com.ibm.cic.common.core.preferences. ftp.proxyHost	ホスト名または IP ア ドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences. ftp.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	c:¥IBM¥common 注: 上記のパスは、こ の設定のデフォルト 値です。通常、イン ストール・パッケー ジが、この設定の独 自の値を提供しま す。	すでにパッケージをイン ストールしている場 合は、このロケーシ ョンを変更することはで きません。

表 5. サイレント・インストール設定のキー (続き)

キー	値	注
com.ibm.cic.agent.core.pref.offering.service.repositories. areUsed	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。「True」の場合、製品のインストール時または更新時にすべてのリンクされたりリポジトリが検索されます。
com.ibm.cic.common.core.preferences. preserveDownloadedArtifacts	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。「True」の場合、パッケージを前のバージョンにロールバックするのに必要なファイルがシステムに保管されます。 「False」の場合、ファイルは保管されません。これらのファイルを保管しない場合、ロールバックするために元のリポジトリまたはメディアに接続する必要があります。

サイレント・インストール・コマンド

この参照テーブルを使用して、サイレント・インストール時に使用する応答ファイル・コマンドについてさらに学習することができます。

表 6. サイレント・インストール時に使用するファイル・コマンド

応答ファイル・コマンド	説明
<p>プロファイルの設定</p> <pre><profile id="the profile (package group) id" installLocation="the install location of the profile"> <data key="key1" value="value1"/> <data key="key2" value="value2"/> </profile></pre>	<p>このコマンドを使用して、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) を作成します。指定されたパッケージ・グループがすでに存在する場合、このコマンドは無効です。現在のところ、プロファイルの作成時に、サイレント・インストールは Eclipse 用とネイティブ用の 2 つのインストール・コンテキストも作成します。プロファイルは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するために <data> エレメントを使用できます。</p> <p>次のリストに、現在サポートされているキーおよび関連した値を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • eclipseLocation キーは、既存の Eclipse のロケーション値を指定します (例えば、c:¥myeclipse¥eclipse)。 • cic.selector.nl キーは、自然言語 (NL) ロケール選択を指定します (例えば、zh、ja、および en)。 注: 複数の NL 値はコンマで区切ります。 <p>次のリストに、現在サポートされている言語コードを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英語 (en) • フランス語 (fr) • 中国語 (簡体字) (zh) • 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW) • ドイツ語 (de) • 日本語 (ja) • スペイン語 (es) • 韓国語 (ko) • ポルトガル語 (pt_BR)
<p>リポジトリの設定</p> <pre><server> <repository location="http://xxx/repository/"> <repository location="file:/C:/repository/"> <!--add more repositories below> <...> </server></pre>	<p>このコマンドを使用して、サイレント・インストール時に使用するリポジトリを指定します。各リポジトリ・ロケーションには、URL またはファイル・パスを指定できます。</p>

表 6. サイレント・インストール時に使用するファイル・コマンド (続き)

応答ファイル・コマンド	説明
<p>インストール</p> <pre><install> <offering profile= "profile id" features= "feature ids" id= "offering id" version= "offering version"> </offering> <!--add more offerings below> <...> </install></pre>	<p>このコマンドを使用して、インストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、または set profile コマンドで作成したプロファイルと一致する必要があります。</p> <p>フィーチャー ID は、"feature1, feature2" のようなコンマ区切りリストで任意に指定できます。フィーチャー ID を指定しなかった場合は、指定したオフリング内のすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p>注: 必須フィーチャーは、コンマ区切りリストで明示的に指定されなかった場合でも、インストールに組み込まれます。</p>
<pre><install modify="true"> または <uninstall modify="true"> (オプションの属性) <uninstall modify="true"> <offering profile="profileID" id="Id" version="Version" features="-"/> </uninstall></pre>	<p>インストールおよびアンインストールのコマンドで <install modify="true"> 属性を使用して、既存のインストールを変更するかどうかを指定します。属性が「True」に設定されない場合、値はデフォルトで「False」になります。変更操作の意図が追加の言語パックをインストールすることのみである場合、オフリング・フィーチャー ID にハイフン「-」を使用して、新しいフィーチャーを追加しないことを指定してください。</p> <p>重要: modify=true およびハイフン「-」フィーチャー・リストは、例で示されているように指定する必要があります。そうでないと、インストール・コマンドはオフリングのデフォルト・フィーチャーをインストールし、アンインストール・コマンドはすべてのフィーチャーを除去します。</p>
<p>アンインストール</p> <pre><uninstall> <offering profile= "profile id" features= "feature ids" id= "offering id" version= "offering version"> </offering> <!--add more offerings below> <...> </uninstall></pre>	<p>このコマンドを使用して、アンインストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、または profile コマンドで指定されたプロファイルと一致する必要があります。さらに、フィーチャー ID を指定しなかった場合は、指定したオフリング内のすべてのフィーチャーがアンインストールされ、オフリング ID を指定しなかった場合は、指定したプロファイル内のすべてのインストール済みオフリングがアンインストールされます。</p>

表 6. サイレント・インストール時に使用するファイル・コマンド (続き)

応答ファイル・コマンド	説明
ロールバック <pre><rollback> <offering profile= "profile id" id= "offering id" version= "offering version"> </offering> <!--add more offerings below> <...> </rollback></pre>	このコマンドを使用して、指定されたオフリングを、指定されたプロファイルに現在インストールされているバージョンからロールバックします。ロールバック・コマンドでフィーチャーを指定することはできません。
InstallAll <pre><installALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用するのと同様です。</p> <pre>-silent -installAll</pre>	このコマンドを使用して、すべての使用可能なインストール可能パッケージを、サイレントで検索およびインストールします。
UpdateAll <pre><updateALL/></pre> <p>注: このコマンドは、次のコマンドを使用するのと同様です。</p> <pre>-silent -updateAll</pre>	このコマンドを使用して、すべての使用可能なインストール可能パッケージを、サイレントで検索および更新します。

参照: サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用して、サイレント・インストール設定、リポジトリ・ロケーション、パッケージ・グループなどの事前定義情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントにインストールすること、またインストール・パッケージのロケーションおよび設定を標準化することを必要とするチームや会社に役立ちます。

サンプル応答ファイル

```
<agent-input >
<!-- add preferences -->
<preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled"
value="c:/temp"/>
<!-- create the profile if it doesn't exist yet -->
<profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile>
<server>
<repository
location=
"http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/">
</repository>/server>

<install>
<offering profile= "my_profile" features= "core" id= "ies"
version= "3.2.0.20060615"> </offering>
</install>

</agent-input>
```

サイレント・インストール・ログ・ファイル

サイレント・インストール・ログ・ファイルで、サイレント・インストール・セッションの結果を確認できます。

サイレント・インストール機能は、サイレント・インストール実行の結果を記録する XML ベースのログ・ファイルを作成します (ログ・ファイル・パスが `-log <your log file path>.xml` を使用して指定される場合)。サイレント・インストール・セッションが成功した場合、そのログ・ファイルには、`<result>` `</result>` のルート・エレメントのみが入ります。しかし、インストール中にエラーが発生した場合、サイレント・インストール・ログ・ファイルには、次のようなメッセージとともにエラー・エレメントが入れられます。

```
<result>
  <error> Cannot find profile: profile id</error>
  <error> some other errors</error>
</result>
```

Installation Manager データ域に生成されたログを調べることで、詳細な分析を行うことができます。設定コマンドを使用して、応答ファイル・トピックで示されているように、オプションでデータ域を望ましいロケーションに設定することができます。

Installation Manager をウィザード・モードで実行

ウィザード・モードは、指定された応答ファイルに基づいてユーザーの設定およびインストールまたはアンインストールの選択がすでに設定されている状態で、**Installation Manager** をインストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかで開始します。応答ファイルには、設定コマンドおよびインストールまたはアンインストール・コマンドのみを入れられます。**Installation Manager** をウィザード・モードで実行する場合、同じ応答ファイルでインストール・コマンドとアンインストール・コマンドを混用することはできません。

コマンド行に次のコマンドを入力して、**Installation Manager** をウィザード・モードで開始します。

```
IBMIM.exe -mode wizard -input <response file>
```

第 6 章 ポストインストール作業

リモート・ヘルプまたは Web ベース・ヘルプ

製品によっては、ヘルプ・コンテンツへのアクセス、そのダウンロードおよび更新を Web から行うことができます。Web ベースのヘルプ・コンテンツにアクセスすることで、製品の最新コンテンツを入手できます。

お使いの製品が Web 上でヘルプ・コンテンツを提供している場合、製品には限られた数のヘルプ・トピックのみがインストールされます。製品はデフォルトで Web に接続し、インフォメーション・センターから直接ヘルプ・コンテンツにアクセスします。インターネットに接続していないときにヘルプにアクセスする必要がある場合は、ヘルプをダウンロードしてローカル・アクセスを行うか、またはシステム管理者がユーザー用に使用可能にしたイントラネット・サーバーがあれば、そのサーバーでインフォメーション・センターに接続することができます。

お使いの製品が Web ベースのヘルプ・コンテンツをサポートしているかどうかについては、インストール・ガイドを参照してください。

インストール処理時には以下の 3 つの方法が利用できますが、これはいつでも変更可能です。

- Web からヘルプ・コンテンツにアクセスできます。この方法では、インストールの占有スペースが最小になり、最新の情報に確実にアクセスできます。これはデフォルトの選択です。

これを選択した場合は、ibm.com[®] Web サイトを介してお使いの製品のインフォメーション・センターにリンクすることになります。製品の Web ベース・ヘルプにアクセスできるのは、インターネットに接続している時のみです。切断時には、製品にインストールされている限られた数のヘルプ・トピックにアクセスできます。

- インターネットから切断している間もヘルプを表示できるように、ヘルプ・コンテンツをコンピューターにダウンロードできます。**重要:** この方法を選択した場合は、ダウンロードするヘルプ・コンテンツおよびフィーチャーを選択できる更新サイトに接続する必要があります。ヘルプは、製品のインストール時に自動的にダウンロードされません。

必要なコンテンツをインフォメーション・センターからダウンロードしてはじめて、切断時の作業中にそれが利用できるようになります。使用可能な変更があれば、コンテンツを更新できます。

- 会社がサポートしている場合に、自社のイントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスできます。この方法は、製品のヘルプ・コンテンツがインストールされている、ファイアウォールの背後にあるサーバーに対して、イントラネット管理者がリンクをセットアップしていることが前提です。これを選択した場合は、自社のイントラネット・サーバーへのリンクを入力する必要があります。管理者が、ヘルプ・コンテンツを定期的に更新しなければなりません。

ユーザーがイントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスできるように設定する際、管理者はイントラネット・サーバーのセットアップおよび更新サイトからのヘルプ・コンテンツのダウンロードに関する指針としてインストール情報を参照してください。

Web ベースのヘルプ・コンテンツにアクセスするのか、ヘルプ・コンテンツをダウンロードしてローカルに使用するのか、またはイントラネットに接続してヘルプを取得するのかわからず、ヘルプ・トピックを開いて解決法を見つけるには「ヘルプ」>「ヘルプ目次」の順にクリックします。

製品のヘルプ・コンテンツへのアクセス方法を変更するための詳しい説明については、製品のインストール・トピックを参照してください。

Web ベースのヘルプ・コンテンツ

Developer for System z ヘルプ・システムは、リモート・ヘルプを使用して Web から動的にコンテンツをプルできるよう構成されています。リモート・ヘルプを使用すると、Developer for System z 内部から常に最新コンテンツを入手できます。ヘルプ・システムによっては、Web 上のヘルプ・コンテンツにアクセスできるよう構成されていません。その場合、ヘルプ・システムはインストール済み環境に含まれます。

ヘルプ情報を取得するには、3 とおりの方法があります。ニーズや状況に応じて、以下のいずれかが最適となります。

- Web 上のヘルプ・コンテンツにアクセスする。インストールの占有スペースが最小になり、最新の情報にアクセスできます。
- ご使用のコンピューターにダウンロードしたヘルプ・コンテンツにアクセスする。インターネットに接続されていない状態でも作業でき、コンテンツは定期的に更新することができます。
- ヘルプ・コンテンツをイントラネット・サーバーにデプロイする。ファイアウォールの背後からヘルプを表示でき、管理者によって更新が行われます。

決定したアクセス方法は、いつでも変更できます。複数の製品を一緒にインストールしている場合は、インストールの占有スペース、使用頻度、およびインターネット・ポリシーに応じて、製品ごとにヘルプの場所を使い分けることができます。インターネットの速度が問題であるなら、1 回のダウンロードに要する時間は長いですが、ローカル・アクセス方式の方が適切な場合があります。その後のヘルプ更新では、差分だけが含まれます。

ユーザーがイントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスできるように設定する際、管理者は WAR ファイルをサーバーにインストールする方法について「Installation Manager インフォメーション・センター」を参照してください。Installation Manager インフォメーション・センターで、「エンタープライズ・インストール項目 (Enterprise installation articles)」->「イントラネット・サーバーからのヘルプ・コンテンツの配信 (Delivering help content from an intranet server)」の順に選択します。

Web ベース・ヘルプへのアクセス

Developer for System z のヘルプは、インターネット上の製品インフォメーション・センターで利用できます。このヘルプは、Developer for System z 内部から表示できます。

始める前に

インストール時に、リモート・インフォメーション・センターからヘルプにアクセスするためのオプションを選択しました。このオプションはデフォルトの選択です。

このタスクについて

Developer for System z ヘルプ・システムは、製品とともにインストールされたコンテンツを取得できるほか、インフォメーション・センターを実行しているリモート・サーバーからもコンテンツを取得できます。Developer for System z のインフォメーション・センターには最新のヘルプ・コンテンツがあり、リモート・インフォメーション・センターからコンテンツを取得するよう Developer for System z が構成されている場合、「ヘルプ」→「ヘルプ目次」を選択してヘルプ・システムを開くことにより、インフォメーション・センターのコンテンツにアクセスできます。

インストール時に、製品インフォメーション・センターからヘルプにアクセスするよう Developer for System z を構成しました。

Developer for System z のインフォメーション・センターは、以下の Web アドレスから使用可能です。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v7r6/index.jsp>

以下の手順に従って、インフォメーション・センターへの接続を確認します。

手順

1. 「設定」ダイアログを開きます。
2. 「ヘルプ」→「コンテンツ」の順に選択します。
3. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」が選択されていることを確認します。
4. Developer for System z インフォメーション・センターの URL が、使用可能なインフォメーション・センターのリストにあることを確認します。対象のインフォメーション・センターがリストされていない場合、以下の手順を完了します。
 - a. 「追加」をクリックします。
 - b. 「名前」フィールドに接続の名前を入力します。
 - c. 「ホスト」フィールドに `publib.boulder.ibm.com` と入力します。
 - d. 「パス」フィールドに `/infocenter/ratdevz/v7r6` と入力します。
 - e. 「デフォルト・ポートを使用」を選択します。
 - f. 「OK」をクリックします。
5. Developer for System z インフォメーション・センターの項目を選択します。
6. 「接続のテスト」をクリックします。

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトを使用したヘルプ・コンテンツのダウンロード

このトピックでは、ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトからヘルプ・コンテンツをダウンロードする方法について説明します。Web 配信を有効にして Developer for System z をインストールする場合、ほとんどのヘルプ・コンテンツはインストールされません。すべてのヘルプ・コンテンツにローカルにアクセスするには、IBM ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムの Web サイトから、またはドキュメンテーション CD の `install_localhelp` ディレクトリーにある `RDz7.6_updateSite.zip` ファイルからコンテンツをダウンロードする必要があります。

始める前に

インストール時にヘルプ・アクセス・オプションとして「ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルにアクセス (Download help and access the content locally)」を選択しました。

このタスクについて

製品のヘルプを使用する前に、お使いのローカル・システムにヘルプをダウンロードする必要があります。

ドキュメンテーション CD の `install_localhelp` ディレクトリーにある `RDz7.6_updateSite.zip` ファイルからヘルプ・コンテンツをインストールする場合、54 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと `RDz7.6_updateSite.zip` ファイルを使用したヘルプ・コンテンツのローカル・インストール』を参照してください。

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトからヘルプ・コンテンツをダウンロードするには、以下の手順を完了します。

手順

1. Developer for System z を開いた状態で、「ヘルプ」→「ローカル・ヘルプ更新プログラム」の順にクリックします。更新プログラムのサイトが開きます。
2. x ペインで、ダウンロードするヘルプの場所を選択します。IBM Rational Developer for System z については、「Developer for System z」を選択してください。Developer for System z がリストにない場合は、場所を追加する必要があります。
 - a. 「内部サイト」タブを選択します。
 - b. 「+」アイコンを選択して、場所を追加します。
 - c. 「リモート」を選択します。
 - d. サイトの名前を入力します。
 - e. URL として `http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/ratdevz/v7r6/site/site.xml` と入力します。
3. 「選択可能なフィーチャー」リストに、ダウンロードできるヘルプのリストが表示されます。ネットワークの接続速度により、この操作に数分かかる場合があります。必要なヘルプ・コンテンツを選択します。

4. 「インストール」をクリックします。 ヘルプ・コンテンツがダウンロードされ、インストールされます。進行状況表示バーが開き、ダウンロードの追跡状況を示します。
5. ダウンロードが完了したら、「ヘルプ」 → 「ヘルプ目次」の順に選択して製品のヘルプを開きます。

タスクの結果

選択したヘルプがシステムにインストールされます。インターネット接続が使用可能な場合は、自動的にファイルが更新されます。

関連タスク

54 ページの『ローカル・ヘルプ更新プログラムと RDz7.6_updateSite.zip ファイルを使用したヘルプ・コンテンツのローカル・インストール』
リモート・ヘルプを使用して Web からヘルプ・コンテンツにアクセスしない場合は、ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールする必要があります。このトピックでは、ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムと、インストール・イメージで提供される RDz7.6_updateSite.zip ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをインストールする方法について説明します。RDz7.6_updateSite.zip ファイルは、IBM Rational Developer for System z ドキュメンテーション CD にあります。更新ダウンロード・サイト (<http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/documentation/updatesites/>) から入手可能です。

ヘルプ・コンテンツの更新

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用して、ヘルプ・コンテンツを最新の状態にします。

始める前に

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラム Web サイトからヘルプ・フィーチャーをインストールしてあります。

このタスクについて

インターネットに接続している場合、製品を始動するたびに更新が自動的にインストールされます。

製品を再始動せずにヘルプを更新するには、以下の手順を完了します。

手順

1. 製品のヘルプ・システム・ウィンドウを閉じます。
2. 「ヘルプ」 → 「ローカル・ヘルプ更新プログラム」の順に選択してローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを開きます。更新プログラムのサイトが開きます。
3. 「インストール済みフィーチャー」タブをクリックします。
4. 「更新の検索」をクリックします。インストールしたコンテンツに対する使用可能な更新があれば、システムにインストールされます。進行状況表示バーが要求の状況を示します。

5. 更新が完了したら、「ヘルプ」 → 「ヘルプ目次」の順に選択して製品のヘルプを開きます。

ローカル・ヘルプ更新プログラムと RDz7.6_updateSite.zip ファイルを使用したヘルプ・コンテンツのローカル・インストール

リモート・ヘルプを使用して Web からヘルプ・コンテンツにアクセスしない場合は、ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールする必要があります。このトピックでは、ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムと、インストール・イメージで提供される RDz7.6_updateSite.zip ファイルを使用してヘルプ・コンテンツをインストールする方法について説明します。RDz7.6_updateSite.zip ファイルは、IBM Rational Developer for System z ドキュメンテーション CD にあります。更新ダウンロード・サイト (<http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/documentation/updatesites/>) から入手可能です。

始める前に

インストール時にヘルプ・アクセス・オプションとして「ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルにアクセス (Download help and access the content locally)」を選択しました。

このタスクについて

製品のヘルプを使用する前に、お使いのローカル・システムにヘルプをインストールする必要があります。

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用してワークステーションにヘルプ・コンテンツをインストールするには、以下の手順を完了します。

手順

1. RDz7.6_updateSite.zip の内容をシステムの一時的な場所に解凍します。このファイルは Developer for System z ドキュメンテーション CD または更新ダウンロード・サイト (<http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/documentation/updatesites/>) で入手可能です。この場所を覚えておきます。
2. Windows Internet Explorer をデフォルト・ブラウザとして使って IBM Rational Developer for System z を開き、「ヘルプ」 → 「ローカル・ヘルプ更新プログラム」の順にクリックします。ローカル・ヘルプ更新プログラムが開きます。
3. 解凍された RDz7.6_updateSite.zip ファイルの場所を指定します。
 - a. 「内部サイト」タブを選択します。
 - b. 「+」アイコンを選択して、場所を追加します。
 - c. 「ローカル」を選択します。
 - d. サイトの名前を入力します。
 - e. 「参照」をクリックして、RDz7.6_updateSite.zip の内容を解凍した場所を参照します。
 - f. site.xml ファイルをダブルクリックして「OK」を選択します。指定した内部サイトが作成され、「内部サイト」タブのリストに表示されます。

- g. 「OK」をクリックします。 ローカル・ヘルプ更新プログラムが RDz7.6_updateSite.zip ファイルに含まれる選択可能なフィーチャーを検索している間、進行状況表示バーが開き、検索の追跡状況を示します。
 - h. 次に、作成した内部サイトをダブルクリックして選択します。ダウンロードに使用できる Developer for System z ドキュメンテーション・フィーチャーが「使用可能なフィーチャー」タブに表示されます。
4. 「IBM Rational Developer for System z ドキュメンテーション」を選択します。このドキュメンテーション・フィーチャーに含まれているヘルプ・フィーチャーが「フィーチャーの記述」タブに表示され、「インストール」ボタンがアクティブ (グレー表示とならない) となります。
 5. 「インストール」をクリックします。 進行状況表示バーが開き、インストールの状況を示します。
 6. インストールの完了後、Developer for System z を終了してから再始動します。
 7. 「ウィンドウ」>「設定」を選択し、次に「ヘルプ目次」を選択します。ローカルのインフォメーション・センターが有効になっていることを確認します。設定・ウィンドウを閉じます。
 8. 「ヘルプ」>「ヘルプ目次」を選択して製品ヘルプを開きます。
 9. 「ヘルプ」→「ヘルプ目次」を選択して製品のヘルプを開きます。

タスクの結果

ローカルにインストールすることを選択したヘルプがシステムにインストールされ、使用することができます。

関連タスク

52 ページの『ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトを使用したヘルプ・コンテンツのダウンロード』

このトピックでは、ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトからヘルプ・コンテンツをダウンロードする方法について説明します。 Web 配信を有効にして Developer for System z をインストールする場合、ほとんどのヘルプ・コンテンツはインストールされません。 すべてのヘルプ・コンテンツにローカルにアクセスするには、IBM ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムの Web サイトから、またはドキュメンテーション CD の install_localhelp ディレクトリーにある RDz7.6_updateSite.zip ファイルからコンテンツをダウンロードする必要があります。

ヘルプ・コンテンツの除去

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用して、インストール済みのヘルプ・コンテンツを除去できます。

始める前に

ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを使用してヘルプ・フィーチャーをダウンロードしてあります。

このタスクについて

インストール済みのヘルプ・コンテンツを除去するには、以下の手順を完了します。

手順

1. 製品のヘルプ・システム・ウィンドウを閉じます。
2. 「オープン」 → 「ローカル・ヘルプ更新プログラム」の順にクリックしてローカル・ヘルプ・システム更新プログラムを開きます。更新プログラムのサイトが開きます。
3. 「インストール済みフィーチャー」タブをクリックします。
4. 除去するフィーチャーを選択した後、「除去」をクリックします。選択したヘルプ・フィーチャーがシステムから除去されます。進行状況表示バーが要求の状況を示します。
5. 除去が完了したら、「ヘルプ」 → 「ヘルプ目次」の順に選択して製品のヘルプを開きます。

ヘルプ・コンテンツ用のイントラネット・サーバーのセットアップ

ユーザーにヘルプ・コンテンツを提供するためのイントラネット・サーバーをファイアウォールの背後にセットアップできます。この方法の場合、ユーザーはヘルプ・コンテンツをダウンロードして自分のコンピューターに保存する必要があります。

始める前に

ユーザーがアクセスできるサーバーがファイアウォールの背後に必要です。

このタスクについて

ヘルプ・コンテンツ用のイントラネット・サーバーをセットアップする方法については「Installation Manager インフォメーション・センター」を参照してください。Installation Manager インフォメーション・センターで、「エンタープライズ・インストール項目 (Enterprise installation articles)」 → 「イントラネット・サーバーからのヘルプ・コンテンツの配信 (Delivering help content from an intranet server)」の順に選択します。

ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法の変更

ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法は変更できます。Web からヘルプにアクセスする方法、ヘルプをダウンロードしてそのコンテンツにローカルにアクセスする方法、またはイントラネット上のサーバーからヘルプにアクセスする方法のいずれかから選択できます。

ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法を変更する前に、ヘルプ・ブラウザを閉じてください。

インストール処理時に、ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法として以下のいずれかを選択しました。

- Web からヘルプにアクセスする。

- ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルにアクセスする。
- イン트라ネット上のサーバーからヘルプにアクセスする。

ヘルプ・コンテンツへのアクセス方法を変更するには、以下の手順を完了します。

1. 「ウィンドウ」 → 「設定」の順にクリックします。「設定」ウィンドウが開きます。
2. 「ヘルプ」項目を展開した後、「コンテンツ」をクリックします。現在構成されているインフォメーション・センターのリストが表示されます。選択したアクセス方法に応じて、以下の手順のいずれかを完了します。
 - IBM Web サイトのインフォメーション・センターからヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、イントラネット・サーバー上のヘルプ・コンテンツにアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. コンテンツのリストで Web アドレスを選択した後、「使用不可」をクリックしてインターネット・サイトへのリンクを使用不可にします。
 - b. 「追加」をクリックした後、イントラネット接続名を指定し、ヘルプ・コンテンツを保持するサーバーのイントラネット Web アドレスを指定してから、「OK」をクリックします。
 - c. 「OK」をクリックして「設定」を閉じます。
 - d. ヘルプを開くために、「ヘルプ」 → 「ヘルプ目次」の順にクリックします。
 - IBM Web サイトのインフォメーション・センターからヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、ヘルプ・コンテンツをダウンロードしてローカルにアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」が選択されていることを確認します。
 - b. コンテンツのリストで製品のインフォメーション・センターへの接続を選択した後、「使用不可」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
 - c. 「追加」をクリックした後、ローカル・ヘルプ接続の名前を入力します。ローカル・ホストのホスト IP アドレス 127.0.0.1 およびパス /help を指定します。任意の未使用ポート番号を選択した後、「OK」をクリックします。
 - d. 作業を保存して閉じ、製品を再始動します。
 - e. ヘルプ・コンテンツをダウンロードするために、52 ページの『ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトを使用したヘルプ・コンテンツのダウンロード』の説明に従います。
- ヘルプ・コンテンツにローカルにアクセスする方法から、IBM Web サイトからヘルプ・コンテンツにアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」が選択されていることを確認します。
 - b. コンテンツのリストでローカル・ホストへの接続を選択した後、「使用不可」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
 - c. 「追加」をクリックした後、対象となる接続を指定し、ヘルプ・コンテンツを含む IBM Web サイトの Web アドレスを指定してから、「OK」をク

リックします。この Web アドレスは、既に接続のリストで選択可能になっている場合があります。リストにある場合は、その接続を選択して、「使用可能」をクリックします。

- d. 「OK」をクリックして「設定」を閉じます。
- e. ヘルプを開くために、「ヘルプ」→「ヘルプ目次」の順にクリックします。
- ヘルプ・コンテンツにローカルにアクセスする方法から、ヘルプ・コンテンツにイントラネット・サーバーからアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」が選択されていることを確認します。
 - b. コンテンツのリストでローカル・ホストへの接続を選択した後、「使用不可」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
 - c. 「追加」をクリックした後、対象となる接続を指定し、ヘルプ・コンテンツを保持するサーバーのイントラネット Web アドレスを指定してから、「OK」をクリックします。
 - d. 「OK」をクリックして「設定」を閉じます。
 - e. ヘルプを開くために、「ヘルプ」→「ヘルプ目次」の順にクリックします。
- イントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、ヘルプ・コンテンツをダウンロードしてローカルにアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. 「リモート・インフォメーション・センターのヘルプ・コンテンツを組み込む」が選択されていることを確認します。
 - b. コンテンツのリストでイントラネット・サーバーへの接続を選択した後、「使用不可」をクリックしてそのリンクを使用不可にします。
 - c. 「追加」をクリックした後、ローカル・ヘルプ接続の名前を入力します。ローカル・ホストのホスト・アドレス 127.0.0.1 およびパス /help を指定します。任意の未使用ポート番号を入力した後、「OK」をクリックします。
 - d. 作業を保存して閉じ、製品を再始動します。
 - e. ヘルプ・コンテンツをダウンロードするために、52 ページの『ローカル・ヘルプ・システム更新プログラムのサイトを使用したヘルプ・コンテンツのダウンロード』の説明に従います。
- イントラネット・サーバーからヘルプ・コンテンツにアクセスする方法から、IBM Web サイトからヘルプにアクセスする方法に変更するには、次の手順に従います。
 - a. コンテンツのリストでイントラネット Web アドレスを選択した後、「使用不可」をクリックしてイントラネット・サイトへのリンクを使用不可にします。
 - b. 「追加」をクリックした後、対象となる接続を指定し、ヘルプ・コンテンツを含む IBM Web サイトの Web アドレスを指定してから、「OK」をクリックします。
 - c. 「OK」をクリックして「設定」を閉じます。

- d. ヘルプを開くために、「ヘルプ」→「ヘルプ目次」の順にクリックします。

ライセンスの管理

インストールした IBM ソフトウェアとカスタマイズしたパッケージのライセンスは、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードは、ライセンス情報を表示して、インストール済みパッケージごとに、ライセンス構成タスクを実行できるようにします。

一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後も製品を使用するには、その製品をアクティブ化する必要があります。「ライセンスの管理」ウィザードを使用すると、製品アクティベーション・キットをインポートすることにより、試用版オフリングをライセンス版にアップグレードすることができます。また、試用版ライセンスまたは永続ライセンスのオフリングに対して、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーからフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

- Rational 製品のライセンスの管理について詳しくは、Rational ライセンス・サポート・ページ (<http://www-306.ibm.com/software/rational/support/licensing/>) を参照してください。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、特定の単一の個人に、Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、何らかの形で製品にアクセスする個々のユーザーごとに、許可ユーザー・ライセンスを取得する必要があります。許可ユーザー・ライセンスは、購入者が長期的または永続的に、元の譲受人を置き換えない限り、再割り当てすることはできません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合は、そのライセンスを特定の個人 1 名に割り当てることができ、その人が対応する Rational ソフトウェア製品を使用できます。許可ユーザー・ライセンスは、ライセンスを受けた人が積極的に使用しない場合であっても、いかなる時点においても、別の人にその製品の使用权を与えるものではありません。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバー間で共有が可能な単一ソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入フローティング・ライセンスの数を超えてはなりません。例えば、Rational ソフトウェア製品に 1 つのフローティング・ライセンスを購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意のある時点でその製品を使用していることがあります。その製品にアクセスしたい別の人は、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを取得して、それを Rational ライセンス・サーバーにインストールする必要があります。

ます。サーバーはエンド・ユーザーのライセンス・キーへのアクセス要求に応答します。アクセスが認可されるのは、組織で購入したライセンス数に一致する数の同時ユーザーです。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスの延長を希望する場合、該当の製品のライセンスを使用可能にする方法は複数あります。

Rational Software Development Platform オファリングのライセンスは、以下の 2 通りの方法で使用可能にされます。

- 製品アクティベーション・キットをインポートする
- Rational Common Licensing を有効にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるようにする

注: 一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後も製品を使用するには、その製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット

製品アクティベーション・キットには、試用版 Rational 製品の永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、アクティベーション・キットの .zip ファイルをローカル・マシンにダウンロードしてから、アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートし、ご使用の製品のライセンスを使用可能にします。アクティベーション・キットを製品にインポートするには、IBM Installation Manager を使用します。

フローティング・ライセンスの適用

必要に応じて、フローティング・ライセンス・キーを取得し、IBM Rational ライセンス・サーバーをインストールして、ご使用の製品に対するフローティング・ライセンスの適用を有効にできます。フローティング・ライセンスを適用することには、以下の利点があります。

- 組織全体にわたりライセンス準拠が適用される
- ライセンス購入数が少なく済む
- IBM Rational Team Unifying and Software Development Platform デスクトップ製品のライセンス・キーを同一ライセンス・サーバーから提供できる

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの取得について詳しくは、62 ページの『ライセンスの購入』を参照してください。

インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

インストール済みパッケージのライセンス情報は、ライセンス・タイプおよび有効期限を含めて、IBM Installation Manager から確認することができます。

ライセンス情報を表示するには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。

パッケージ・ベンダー、現在のライセンス・タイプ、および有効期限は、インストール済みパッケージごとに表示されます。

製品アクティベーション・キットのインポート

永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーをインストールするには、アクティベーション・キットをダウンロード場所または製品メディアから IBM Installation Manager を使用してインポートする必要があります。

アクティベーション・キットを購入していない場合は、最初にそれを購入する必要があります。製品または製品アクティベーション・キットを購入してある場合は、該当の CD を挿入するか、またはアクティベーション・キットを IBM Passport Advantage から、アクセス可能なワークステーションにダウンロードします。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ(.jar) ファイルとしてパッケージされています。.jar ファイルは永続ライセンス・キーを含みます。このファイルをインポートして、ご使用の製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット .jar をインポートして、新しいライセンス・キーを有効にするには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。
3. パッケージを選択し、「**アクティベーション・キットのインポート**」ボタンをクリックします。
4. 「**次へ**」をクリックします。現在のライセンスの種類、およびライセンスのバージョン範囲など、選択したパッケージの詳細が表示されます。
5. アクティベーション・キットのメディア CD またはダウンロード場所でパスを参照してから、該当の Java アーカイブ (.jar) ファイルを選択し、「**開く**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックします。「**要約 (Summary)**」ページに、アクティベーション・キットのターゲット・インストール・ディレクトリー、新規ライセンスの適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「**完了**」をクリックします。

永続ライセンス・キーを含む製品アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「ライセンスの管理」ウィザードが、インポートが正常に終了したかどうかを示します。

フローティング・ライセンスの使用可能化

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、ご使用の製品のフローティング・ライセンスを使用可能にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を有効にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手する必要があります。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing による管理について詳しくは、「*IBM Rational License Management Guide*」を参照してください。

指定されたパッケージのライセンス・タイプとしてフローティング・ライセンスを使用可能にして、ライセンス・サーバー接続を構成するには、以下を行います。

1. Rational Software Development Platform の IBM Installation Manager で、「ファイル」->「開く」->「ライセンスの管理」をクリックします。
2. パッケージのバージョンを選択し、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を有効にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を以下のように構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルで空のフィールドをクリックするか、または「追加」ボタンをクリックします。
 - b. 管理者から代替サーバー環境に関する情報を受け取った場合は、「代替サーバー」ボタンをクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの名前とポートのフィールドが表示されます。
 - c. 「名前」フィールドにライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
 - d. (オプション) ファイアウォールが使用される環境の「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示されない限り、このポートには値を割り当てないでください。
 - e. 代替サーバー環境の場合は、2 次サーバーおよび 3 次サーバーの名前と (必要ならば) ポートを入力します。
 - f. (オプション) 「接続のテスト」ボタンをクリックして、接続情報が正しいこと、およびサーバーが使用可能であることを確認できます。
 - g. 「OK」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。
7. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リストのライセンスの順序は、ご使用のパッケージが、特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセスを試みる順序を決定します。
8. 「完了」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードが、フローティング・ライセンスの構成が正常に終了したかどうかを示します。

ここで、有効になった製品を次に開くと、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを取得するために、ライセンス・サーバーとの間に接続が作成されます。

ライセンスの購入

現行製品ライセンスの期限切れが近づいている場合、またはチーム・メンバー用に製品ライセンスを追加で取得したい場合、新規ライセンスを購入できます。

ライセンスを購入して、ご使用の製品を有効にするには、以下の手順を完了します。

1. 購入したいライセンスのタイプを決定します。

2. ibm.com にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取って、製品ライセンス製品を購入します。詳しくは、ソフトウェアのご注文方法 に関する IBM Web ページを参照してください。
3. 購入するライセンスのタイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを行って、ご使用の製品を有効にします。
 - ご使用する製品の許可ユーザー・ライセンスを購入する場合は、*Passport Advantage* にアクセスし、そこの指示に従って、製品アクティベーション・キット・ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードしたら、製品アクティベーション .jar ファイルを *Installation Manager* を使用してインポートする必要があります。
 - ご使用する製品のフローティング・ライセンスを購入する場合は、*IBM Rational Licensing and Download* サイト へのリンクをクリックし、ログインして (IBM への登録が必要)、IBM Rational ライセンス・キー・センターに接続するためのリンクを選択します。これで、ライセンス証書を使用して、ライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得することができます。

必要に応じて、*Passport Advantage* にもアクセスし、ご使用の製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることができます。アクティベーション・キットのインポート後、PC を長期間、オフライン状態で使用する場合には、ライセンス・タイプをフローティングから永続へと切り替えることができます。

アクティベーション・キットをインポートしたい場合、またはご使用の製品にフローティング・ライセンス・サポートを有効にしたい場合には、*IBM Installation Manager* の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

ライセンスのサイレント・インストールおよび設定

製品ライセンスをインポートして、サイレントにフローティング・ライセンス・サポートを設定できます。これは、パッケージをサイレントにインストールできるのと同じように行えます。ライセンス構成タスクを実行するために、*IBM Installation Manager* が使用する応答ファイルを生成する必要があります。応答ファイルの記録、およびサイレント・インストールの実行について詳しくは、37 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。応答ファイルを記録する場合は、「ライセンスの管理」パネルを使用して、アクティベーション・キットをインポートするか、フローティング・ライセンス・サポートの設定を行ってから、*Installation Manager* を終了します。これらのタスクをサイレントに実行するために必要な情報が応答ファイルに書き込まれます。

第 7 章 Developer for System z の開始

Developer for System z は、Windows デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから、以下のように開始することができます。

- Windows の「スタート」メニューから IBM Rational Developer for System z を開始するには、「スタート」->「すべてのプログラム」->「[package group name]」->「**IBM Rational Developer for System z**」->「**IBM Rational Developer for System z**」をクリックします。
- Developer for System z をコマンド行から開始するには、<product install directory>%eclipse.exe -product com.ibm.rational.developer.systemz.product.ide と入力します。

第 8 章 インストール済みパッケージの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」を使用すると、フィーチャーを追加または除去することによって、インストール済みパッケージの内容を変更できます。この機能は、IBM Installation Manager を使用してインストールされたパッケージでのみ使用可能です。

注: インストール済み環境を変更するために、元のインストール・メディアおよび更新メディアへのアクセスが必要になることがあります。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプ を参照してください。

注: 変更する前に、Installation Manager を使用してインストールされたすべてのプログラムをクローズしてください。

注: Eclipse ロケーションまたは JVM を変更することはできません。

インストール済みパッケージを変更するには、以下の手順を行います。

1. Installation Manager のメインパネルから、「**パッケージの変更**」アイコンをクリックします。
2. 「**パッケージの変更**」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「**キャンセル**」をクリックし、「**ファイル**」->「**インストール済みパッケージの表示**」をクリックします。表示されるページに、システムにインストール済みのパッケージとパッケージ・グループが示されます。準備が整ったら、「**パッケージの変更**」を再びクリックし、パッケージ・グループを選択して、先に進むために「**次へ**」をクリックします。
3. 「**言語**」パネルで、追加または除去する言語を選択または選択解除し、「**次へ**」をクリックします。
4. 「**フィーチャー**」パネルで、現在インストールされているフィーチャーが事前選択されています。インストールする追加フィーチャーを選択するか、除去するインストール済みフィーチャーを選択解除します。選択が終了したら、「**次へ**」をクリックして先に進みます。
5. インストール済み環境の変更を開始する前に、「**要約**」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして変更します。選択項目が適切である場合は、「**変更**」をクリックして、指定した変更を行います。変更プロセスが開始され、進行標識にプロセスが完了したパーセンテージが示されます。
6. 「**完了**」ページに結果が表示されます。
7. 「**ログ・ファイルの表示 (View Log File)**」をクリックして、完全なインストール・ログを表示します。

第 9 章 インストール済みパッケージの更新

IBM Installation Manager を使用して、Installation Manager によってインストールされたパッケージの製品更新および新規フィーチャーをインストールできます。

デフォルトでは、システムからアクセス可能なローカル更新リポジトリまたはネットワーク更新リポジトリをリポジトリ設定が指している場合を除き、更新をインストールするにはインターネット・アクセスが必要です。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプ を参照してください。

注: 更新する前に、Installation Manager を使用してインストールされたすべてのプログラムをクローズしてください。

パッケージ更新を検索してインストールするには、以下の手順を行います。

1. 特定のリポジトリ、例えば、イントラネット内の HTTP Web サーバー上に保管されているリポジトリから更新をインストールする場合は、先に進む前に、Installation Manager 設定でリポジトリ・ロケーションを指定する必要があります。Installation Manager で更新のインターネット検索を行うときは、このステップを実行する必要はありません。

注: Installation Manager 設定でリポジトリの指定を行った場合、Installation Manager は、指定されたりポジトリの検索に加えて、更新のインターネット検索もやはり行います。Installation Manager で更新の検索を行いたくなければ、「ファイル」->「設定」と進み、「リポジトリ」パネル下部にある「インストール中および更新中のサービス・リポジトリの検索」チェック・ボックスを選択解除します。こうすると、Installation Manager に対して、インターネットで検索を行わずに、設定で指定されたりポジトリでのみ検索するように指示することになります。

2. Installation Manager のメインパネルから、「更新」をクリックします。
3. 「パッケージの更新」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「キャンセル」をクリックし、「ファイル」->「インストール済みパッケージの表示」をクリックします。表示されるページに、システムにインストール済みのパッケージとパッケージ・グループが表示されます。すべてのインストール済みパッケージの更新の確認を行う場合は、「すべて更新」チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックして先に進みます。
4. Installation Manager は、インストール済みパッケージに使用可能な更新を検索します。次のパネルに、検出された選択可能な更新のリストが表示されます。
5. デフォルトでは、推奨される更新だけが表示されます。パッケージのすべての更新を表示する場合は、「すべて表示」をクリックします。更新は、必要な依存関係が事前選択された状態で表示されます。
6. インストールする更新を選択し、「次へ」をクリックします。

7. 「**ライセンス**」パネルで、選択した更新のご使用条件をお読みください。インストールするように選択した各更新にご使用条件があります。「**ライセンス**」パネルの左側にある各パッケージ名をクリックして、そのご使用条件を表示してください。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「**同意する (I accept the terms of the license agreements)**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
8. 更新のインストールを開始する前に、「**要約**」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が適切である場合は、「**更新**」をクリックして更新をインストールします。更新のインストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが示されます。
9. 「完了」ページに結果が表示されます。
10. 「**ログ・ファイルの表示 (View Log File)**」リンクをクリックして、全インストール・ログを表示します。

第 10 章 Developer for System z のアンインストール

Installation Manager の「アンインストール」オプションを使用すると、以前に Installation Manager を使用してインストールされたパッケージをアンインストールすることができます。

パッケージをアンインストールするには、そのパッケージのインストールに使用した同一のユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。アンインストール・プロセスを開始するには、以下のいずれかを行います。

- Windows の「プログラムの追加と削除」画面から、「IBM Rational Developer for System z」(パッケージ・グループ名)を選択して、「**削除**」をクリックします。これにより、IBM Installation Manager が起動します。
- Windows の「スタート」メニューから、「**スタート**」->「**すべてのプログラム**」->「**IBM Installation Manager**」->「**IBM Installation Manager**」をクリックします。

注: 非管理者によるインストールを行った場合、「**スタート**」->「**すべてのプログラム**」->「**My IBM Installation Manager**」->「**My IBM Installation Manager**」をクリックします。

1. Installation Manager を使用してインストールしたすべてのプログラムをクローズします。
2. Installation Manager のメインパネルから、「**パッケージのアンインストール**」をクリックします。
3. 「**パッケージのアンインストール**」パネルで、アンインストールするパッケージを選択します。「**次へ**」をクリックします。
4. 「**パッケージ**」ページで、アンインストールするパッケージを選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「**要約**」パネルで、アンインストールするために選択したパッケージを確認します。何らかの変更を行う場合は、「**戻る**」をクリックします。アンインストール・プロセスを開始するには、「**アンインストール**」をクリックします。
6. アンインストールが終了すると、「**完了**」パネルが表示されて結果が示されます。
7. 「**完了**」をクリックします。

第 11 章 マイグレーション

WebSphere Developer for zSeries® または WebSphere Developer for System z ワークスペースのマイグレーション

WebSphere Developer for zSeries 6.0.1 または WebSphere Developer for System z 7.0 で使用したワークスペースがあり、それを IBM Rational Developer for System z バージョン 7.6.1 で使用するためにマイグレーションしたい場合は、以下の手順に従ってください。

1. IBM Rational Developer for System z バージョン 7.6.1 をインストールします。
2. マイグレーションするワークスペースの名前を指定して、Rational Developer for System z を開始します。古いワークスペースは、古い成果物がすべて新しいワークスペースに存在し、表示されるように自動的にマイグレーションされます。
3. Rational Developer for System z バージョン 7.5 ワークスペースが、バージョン 7.6.1 にマイグレーションされます。

注: Developer for System z をバージョン 7.5 からバージョン 7.6.1 にアップグレードできます。バージョン 7.6.1 は、インストール場所を変えれば、Developer for System z のこれまでのすべてのバージョンと共存も可能です。

付録 A. 追加ソフトウェアのインストール

必要な System z コンポーネントのインストール

必要な System z コンポーネントのインストールの詳細は、「*Developer for System z* ホスト・プランニング・ガイド」を参照してください。

IBM TxSeries for Multiplatforms のインストール

CICS TxSeries for Multiplatforms にはローカル CICS 開発プラットフォームが用意されているため、CICS プログラムの開発が可能です。

CICS TxSeries には専用のインストール資料のセットがあり、製品に同梱のディスクに入っています。

IBM TxSeries for Multiplatforms をインストールするには、以下を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD を挿入するか、または電子イメージの RDz76Edition_Setup ディレクトリーを開きます。
2. launchpad.exe を実行して、ランチパッド・プログラムを開始します。
3. ランチパッド・ウィンドウの左側にある「オプション・ソフトウェアのインストール」タブをクリックします。
4. 「IBM TxSeries for Multiplatforms v7.1 インストールの起動」をクリックして、インストールを起動します。
5. プロンプトが出されたら、IBM TxSeries for Multiplatforms v7.1 インストール CD を挿入するか、または電子インストール・イメージを含むロケーションを指定します。
6. インストールが開始したら、画面のプロンプトに従ってインストールを実行します。

UML Profiles for COBOL Development 拡張機能のインストール

注: この拡張機能をインストールする前に、IBM Rational Software Architect バージョン 7.5 をインストールしておくか、またはそれを拡張機能と同時にインストールする必要があります。この拡張機能は、Developer for System z がインストールされていてもいなくても、インストールすることができます。

UML Profiles for COBOL Development 拡張機能をインストールするには、以下を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD を挿入するか、または電子イメージの RDz76Edition_Setup ディレクトリーを開きます。
2. launchpad.exe を実行して、ランチパッド・プログラムを開始します。
3. ランチパッド・ウィンドウの左側にある「オプション・ソフトウェアのインストール」タブをクリックします。

4. 「**UML Profiles for COBOL Development インストールの起動**」をクリックして、インストールを起動します。
5. プロンプトが出されたら、UML Profiles for COBOL Development 拡張機能インストール CD を挿入するか、または電子インストール・イメージを含むロケーションを指定します。
6. IBM Installation Manager が開始したら、画面のプロンプトに従ってインストールを実行します。

IBM Rational Software Architect をすでにインストールしてある場合は、インストール用に既存のパッケージ・グループの選択を求めるプロンプトが出されたときに、インストール先のパッケージ・グループを選択します。

Rational Software Architect を UML Profiles for COBOL Development と同時にインストールする場合は、新規パッケージ・グループを作成するか、既存のパッケージ・グループにインストールするかのいずれかが可能です。

RSE Server for Multiplatform のインストール

オプションの RSE サーバーのインストールの詳細は、*IBM Rational Developer for System z RSE Server for AIX, Linux*、および *Linux on System z* インストール CD の「*Developer for System z RSE* サーバー インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

付録 B. 既知の問題および制限事項

このセクションでは、インストールおよびアンインストールにおける既知の問題と制限事項について説明します。

製品の問題および制限事項の詳細については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD の Documents¥en ディレクトリーにある `readme.html` ファイルを参照してください。

WebSphere Developer for zSeries バージョン 6.0.1 ワークスペースの非互換性

Rational Developer for System z 7.6.1 で使用されるワークスペースは、WebSphere Developer for zSeries 6.0.1 との互換性がありません。WebSphere Developer for zSeries 6.0.1 からのワークスペースを使用して Rational Developer for System z 7.6.1 を開始した場合、ご使用のワークスペースは Rational Developer for System z 7.6.1 で機能するようにマイグレーションされます。Rational Developer for System z 7.6.1 をアンインストールして WebSphere Developer for zSeries 6.0.1 ワークスペースの使用を継続する計画の場合は、Rational Developer for System z 7.6.1 をインストールする前に、WebSphere Developer for zSeries 6.0.1 ワークスペースのバックアップを行っておく必要があります。

付録 C. IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用して、HTTP または HTTPS 経由で使用可能な Web サーバーに配置できるリポジトリにパッケージをコピーできます。

Packaging Utility ソフトウェアは、IBM Rational の補助 CD に入っています。Developer for System z および他のパッケージの入ったリポジトリを、HTTP 経由で使用可能な Web サーバーに配置する場合は、Packaging Utility を使用して、それらのパッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティを使用して、以下の作業を行うことができます。

- パッケージの新規リポジトリを生成します。
- パッケージを新規リポジトリにコピーします。複数のパッケージを単一リポジトリにコピーして、IBM Installation Manager を使用した製品のインストール元となる共通ロケーションを企業内に作成することができます。
- パッケージをリポジトリから削除します。

ツールの使用方法について詳しくは、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して Developer for System z パッケージをコピーする前に、Packaging Utility を圧縮ファイルから解凍する必要があります。

以下の手順で、IBM Packaging Utility ソフトウェアを解凍します。

1. Packaging Utility 圧縮ファイルを IBM Rational 補助 CD で探します。Packaging Utility を収容する圧縮ファイルは、IBM Rational Application Developer 補助 CD に入っています (PackagingUtility\pu.disk_win32.zip)。
2. ユーティリティの入った圧縮ファイルからファイルを一時ディレクトリに解凍します。圧縮ファイルのディレクトリを保持するようにしてください。Packaging Utility のインストールに使用するインストール・ファイルがあります。
3. Packaging Utility インストール・ファイルを解凍したディレクトリに変更して、インストール・プログラムを開始します。
4. InstallerImage_win32¥install.exe を実行します。
5. Installation Manager が開始します。「パッケージのインストール」ウィザードは、Packaging Utility をインストールするように構成されています。
6. 「パッケージのインストール (Install Packages)」ウィザードの画面上の指示に従って、インストールを完了します。

Packaging Utility を使用してパッケージを HTTP サーバーにコピー

HTTP サーバーにリポジトリを作成する場合は、Packaging Utility を使用してパッケージをそのリポジトリにコピーする必要があります。Packaging Utility は、複数の製品パッケージおよびサービス更新を単一リポジトリ・ロケーションへ結合するために使用できます。詳しくは、Packaging Utility オンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility でパッケージをコピーするには、以下の手順を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから、「スタート」->「すべてのプログラム」->「IBM Packaging Utility」->「IBM Packaging Utility」で、Packaging Utility を開始します。
2. ユーティリティのメインページで、「パッケージのコピー」をクリックします。
3. 提供される情報を読み、「次へ」をクリックします。
4. 「ソース」パネルで、「リポジトリを開く...」をクリックし、コピーするパッケージの場所を入力します。Developer for System z およびそのバンドル・オフアリングでは、*IBM Rational Developer for System z* インストール・セットアップ CD 上か、電子イメージの RDz76Edition_Setup ディレクトリ内のいずれかの repository.config ファイルを指します。

代わりに、「Passport Advantage...」を選択して、Passport Advantage ID およびパスワードを入力し、パッケージを Passport Advantage からコピーすることができます。

5. 選択したリポジトリで選択可能なパッケージのリストから、インストールするパッケージを選択します。「次へ」をクリックします。
6. 選択したパッケージのご使用条件をお読みください。すべてのご使用条件に同意する場合は、「同意する (I agree with the terms of the license agreements)」をクリックし、「次へ」をクリックします。
7. 「宛先」パネルで、既存のリポジトリを選択するか、または「参照」をクリックしてリポジトリの保管場所を選択します。宛先を選択したら、「OK」をクリックします。
8. 「次へ」をクリックして、「要約」ページに進みます。「要約」ページには、宛先リポジトリにコピーされる、選択したパッケージが表示されます。また、このページには、コピーが必要とするストレージ・スペース量が、ドライブ上の使用可能スペースとともに表示されます。
9. 変更を加えたい場合は、「戻る」をクリックして、前のパネルに戻って変更を加えます。選択内容が適切である場合は、「コピー」をクリックして、選択したパッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部にステータス・バーが表示され、コピー・プロセスの残り時間を示します。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされたすべてのパッケージが表示されます。
10. 「完了 (Done)」をクリックして、Packaging Utility のメインページに戻ります。
11. ご使用のリポジトリに追加のオフアリングをコピーする場合には、コピーする追加のパッケージを指定して、ステップ 2 から 10 を繰り返します。

これで、Packaging Utility を使用して Developer for System z のインストール・ファイルがリポジトリにコピーされたため、Web サーバーまたは他の共用ドライバーの上にリポジトリを配置し、それを HTTP または HTTPS 経由で 사용할ことが可能になりました。(リポジトリは UNC ドライブに配置することもできます。)

IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項

© Copyright IBM Corporation - 2010

実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502
神奈川県大和市下鶴間1623番14号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
3039 Cornwallis Road, PO Box 12195
Research Triangle Park, NC 27709
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名は、IBM または各社の商標です。現時点での IBM の商標リストについては、Web 上の www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Intel および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX[®] は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール, IBM Rational Developer for System z 71
アンインストールと Installation Manager 21
イメージ (電子), 解凍と検査 11
イメージ, 共用ドライブからのインストール 12, 27
イメージ, ワークステーション上のイメージからのインストール 12, 26
インストール
 インストール・イメージからのローカル・ヘルプ・コンテンツ 54
インストール CD, インストール 11
インストール, インストール CD から 11
インストール, 共用ドライブ上のイメージから 12, 27
インストール, 計画 11
インストール, サイレント 37
インストール, 対象フィーチャーの決定 12
インストール, 追加ソフトウェア 75
インストール, 必要な System z サーバー・ツール 75
インストール, 変更 67
インストール, ワークステーション上のイメージから 12, 26
インストール, HTTP サーバー上のリポジトリから 12, 28
インストール, Installation Manager 20
インストール, Packaging Utility 79
インストール作業 25
インストール済みパッケージ, ライセンス情報の表示 60
インストール方式 11
インストール要件, クライアント 3
インストール・コマンド, サイレント 43
インストール・リポジトリ 21
インストール・ログ・ファイル, サイレント 47
イントラネット・サーバー
 ヘルプ・コンテンツの提供 56
応答ファイル, 作成 39

応答ファイル, サンプル 46
応答ファイル・コマンド 41
オペレーティング・システム
 サポート 6
 要件 6

[カ行]

開始, IBM Rational Developer for System z 65
解凍と検査, 電子イメージ 11
開発環境, 統合 13
概要, Developer for System z 1
環境, System z 統合開発 13
管理, ライセンス 59
既存の Eclipse IDE, 拡張 23
共用ドライブ, イメージからのインストール 12, 27
共用リソース・ディレクトリー 22
クライアント前提条件, IBM Rational Developer for System z 5
クライアント・インストール要件 3
グループ, パッケージ 22
計画とインストール 11
検査と電子イメージ, 解凍 11
更新
 ローカル・ヘルプ・コンテンツ 53
更新, IBM Rational Developer for System z 69
コマンド, 応答ファイル 41
コマンド, サイレント・インストール 43
コマンド, サイレント・インストール設定 41

[サ行]

サーバー, インストール 12, 28
サーバー, インストール・パッケージの配置 29
サーバー・ツール, 必須なインストール 75
サイレント, インストール 37
サイレント・インストール設定コマンド 41
サイレント・インストール・コマンド 43
サイレント・インストール・モード, Installation Manager の実行 40
サイレント・インストール・ログ・ファイル 47
作業, インストール 25
作業, プリインストール 1

作業, ポストインストール 49
作成, 応答ファイル 39
サポート
 オペレーティング・システム 6
サンプル応答ファイル 46
使用可能化, ライセンス 60
除去
 ローカル・ヘルプ・コンテンツ 55
制限事項, 既知 77
設定, Installation Manager での設定 22
前提条件
 オペレーティング・システム 6
 ソフトウェア 6, 7
 特権 9
 ハードウェア 5
 ブラウザー 8
 ユーザー特権 9
 Acrobat Reader 8
 Adobe Acrobat Reader 8
 DB2 Enterprise Server Edition 7
 Rational Software Architect 8
 TXSeries 7
 Web ブラウザー 8
前提条件と IBM Rational Developer for System z, クライアント 5
相互必要条件
 Rational Team Concert for System z 8
ソフトウェア
 前提条件 6, 7
 要件 6, 7
ソフトウェア, 追加インストール 75

[タ行]

ダウンロード
 ローカル・ヘルプ・コンテンツ 52
ツール, 必要な System z サーバー・ツールのインストール 75
追加ソフトウェア, インストール 75
ディレクトリー, 共用リソース 22
電子イメージ, 解凍と検査 11
統合開発環境 13

[ハ行]

ハードウェア
 前提条件 5
 要件 5
配置, インストール・パッケージを HTTP サーバーへ 29

パッケージの HTTP サーバーへのコピー 80

パッケージ・グループ 22

非互換性、ワークスペース 77

必要な System z サーバー・ツール、インストール 75

フィーチャー 13

フィーチャー、インストール対象の決定 12

ブラウザー

前提条件 8

プリインストール作業 1

ヘルプ・コンテンツ

イントラネット・サーバー 56

更新 53

ダウンロード 52

除去 55

リモート・ヘルプ・サーバー 50

変更、インストール 67

方式、インストール 11

ポストインストール作業 49

[マ行]

メディア要件 3

問題、既知 77

[ヤ行]

ユーザー特権 9

要件

オペレーティング・システム 6

ソフトウェア 6, 7

特権 9

ハードウェア 5

ユーザー特権 9

要件、クライアント・インストール 3

要件、メディア 3

[ラ行]

ライセンス、管理 59

ライセンス情報、表示 60

ライセンスの使用可能化 60

リポジトリ、インストール 21

リポジトリ設定、Installation Manager
での設定 22

リモート・ヘルプ

ヘルプ・サーバー 50

ローカル・ヘルプ・コンテンツ

インストール

インストール・イメージ 54

ログ・ファイル、サイレント・インストール 47

[ワ行]

ワークスペースの非互換性 77

A

Acrobat Reader

前提条件 8

Adobe Acrobat Reader

前提条件 8

C

CARMA 17

Common Access Repository Manager
(CARMA) 17

D

DB2 Enterprise Server Edition

前提条件 7

Developer for System z、概要 1

E

Eclipse IDE、既存の拡張 23

F

Fault Analyzer 16

File Manager 16

H

HTTP サーバー、インストール・パッケージの配置 29

HTTP サーバー、パッケージのコピー 80

HTTP サーバー、リポジトリからのインストール 12, 28

I

IDE、既存の Eclipse の拡張 23

Installation Manager 19

Installation Manager、アンインストール
21

Installation Manager、インストール 20

Installation Manager、ウィザード・モード
での実行 47

Installation Manager、開始 21

Installation Manager、サイレント・インストール・モードでの実行 40

Installation Manager、リポジトリ設定
22

P

Packaging Utility 79

Packaging Utility、インストール 79

Packaging Utility、パッケージの HTTP サーバーへのコピー 80

R

Rational Developer for System z、アンインストール 71

Rational Developer for System z、開始
65

Rational Developer for System z、クライアント前提条件 5

Rational Developer for System z、更新
69

Rational Software Architect

前提条件 8

Rational Team Concert for System z
相互必要条件 8

S

SCLM Developer Toolkit 14

T

Toolkit, SCLM Developer 14

TXSeries

前提条件 7

W

Web ブラウザー

前提条件 8

Web ベース・ヘルプ

アクセス 51



プログラム番号: 5724-T07

Printed in Japan

GI88-4129-03



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21